
偶然という名の奇跡～愛の記憶喪失～

城ノ内 ジョウ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

偶然という名の奇跡〜愛の記憶喪失〜

【Nコード】

N1020C

【作者名】

城ノ内 ジョウ

【あらすじ】

親友の恋の手伝いをする羽目になってしまった主人公。しかしその先には思いも寄らぬ事件が待っていた。

プロローグ

プロローグ

今日もいつもと同じ一日だった。

最近では、誰もいない家の鍵を開けて中に入ると、ただいまよりも先にこの言葉が頭に浮かんでくる。学校が終え、帰宅した現在午後五時過ぎ。季節は秋。

高校に入ってから始めた一人暮らしも半年以上経った今ではすっかり日常と化してしまった。料理を作るのも最初は面白かったが、飽き始めているのが現状である。

朝起きて、適当に朝食を取り、学校へ向かう。学校では授業を受けて、友達とふざけ合って、下校時刻に帰宅。家に帰れば夕飯食べ、風呂に入って、適当にゴロゴロして、そのまま就寝。次の日、朝起きて、適当に朝食を取って……。

毎日同じことの繰り返しだった。

しかし俺は普通の高校生である。オリンピッククに出場できるほどスポーツが得意なわけでもないし、ほかに特別な身分と持ち合わせでいたりしない。ましてや機関銃を爽快にぶっ放したりしたことなどあったり、見た目は子供、頭脳は大人、だったりするわけがない。たいいていの高校生は俺と変わらず同じことを繰り返して毎日を過ごしているだろう。常に非日常に遭遇しているような奴はほんの一握り。ならば俺の生活にはなんら問題ないはずだ。

大体俺は面倒くさがりで、毎日毎日おかしなことが起きてそのたびに頭を抱えなければいけない、そんな面倒な人生は勘弁。御免こらむりたいわけである。実のところ、俺はこんな毎日は嫌いではなかった。もちろんずっとこのままでいいわけではないのは理解していたのだが、そんな先のことまで思い描けるような千里眼は持ち合わせていないし、高校生であるうちはこんな毎日でいいんじゃないかと思っていた。

しかしこのとき俺はまだ、知らなかったのだ。平和と戦争は一心同体、コインの表裏だということを。戦争の先には必ず平和があり、かつ、平和の先には必ず戦争が発生することを。戦争は平和の延長であり、平和は戦争の延長であるのだ。結局何が言いたいかと言うと俺の日常という名の平和は、一瞬のうちに姿を消し、その代わりに非日常という名の戦争が新たに俺の前に姿を現したのだ。

振り返って考えてみると、おそらく、この発端は金曜日の放課後であろう。小さい出来事だったが、その出来事は瞬く間に拡大してしまった。その拡大の原因は、これだけは100%言い切れる、俺ではない。

金曜日の出来事

金曜日の出来事

今日もいつもの様に何気なく学校の学習メニューを終え、帰路に着いた俺は、これまたいつもの様に今日の夕飯の献立を考えていた。

飽きたとはいえ、料理は俺にとって毎日しなくてはならないものの一つ。料理が面倒なら、外食したり、出来上がっているものを買ってきたりすればいいのだが、外食は外食で面倒だし、出来上がっているものはどうも好きになれない。第一、自分で金を稼いでいない学生の分際で毎日外食をするのは生理的に受け付けない。

毎月普通に暮らしている分には困らないだけの仕送りを貰っているのだが、使わないで済むなら、使わないに越したことはない。自分で料理する、というだけで節約できるのならば、自分で作るべきだと勝手に考えているのだ。

やってみれば分かるが、一口に料理と言ってもかなり幅が広い。最近では飽きを紛らわせるために、一般の家庭料理から少々逸脱したものにまで挑戦している。

「おい、成瀬！聞いてくれよ！」

途中で料理の本でも買って帰ろうかなと思っていたところで、後ろから誰かに話しかけられた。

反射的に耳が拒否するようなフレーズで話し掛けてきたのは、腐れ縁でもう十年以上同じ学校に通っている麻生、その人だった。

俺の歳で十年以上というところ、小学校よりも前からの付き合いになる。幼稚園からの付き合いだ。正直物心付いたときにはこいつがいたと言っても言い過ぎではない。もう友達というより家族に近い。

「なあー。聞いてくれよおー」

麻生は無視を決め込んでいた俺に、纏わり付いてきた。

「解った。聞いてやるからすぐに離れる」

俺がそう言うところ麻生は、さすが親友、とか言って素早く離れると早速話し始めた。

「デデデデデートトオオすうすうすることになった」

……。日本語でしゃべってもらいたい。生憎だが俺は地球語、それも日本語しか、マスターしていないし、マインドスキャンも習得していないんでね。

「なんだって？」

「だからデデデデートが決まったんだって！」

興奮して頭がおかしくなってしまったようだ。しばらくの間抜けなやり取りが続いた。何回聞いても『デートする』以上の情報が得られない。麻生は麻生で俺が解ってくれないことに憤りを感じたようで、一生懸命喋り始めた。

しかしこれまたよく解らないので、この辺のやり取りは割愛させてもらおう。

麻生の話を纏めると大体こういうことになる。

「つまり、以前から好きだった女子と二人だけのデートが決まった、と？」

「そうだ！だからそう言ってるじゃないか！！」

悪いが全然解らなかったね。

麻生の好きな人とは笹倉京子といい、隣のクラスの女子である。今まで複数では遊びに行ったことがあったらしいが、二人きりは今回が初めてらしい。

延々今までの遊びに行ったときのことやら会話やらを話しまくり、最終的には自分は相手に好かれていないに違いないなどという妄想じみた結論を下していた。正直興味が全くないのだが、話し出したら止まらないのも聞かないとうるさいのもよく知っているので大人しく聞いていた。

しかしこいつから女子を誘うのは珍しい。なぜならこいつはもてるのである。馬鹿でうるさいことを除けば、はっきり言って顔はいいし、背も高いので見栄えはいい。よく女子と遊んでいるのだが、誘われるほうなのだ。意外だなと思っていたのだが、そこまで興味も無いし、せいぜいデートがうまくいってほしいと思っただけで大して考えなかった。

そして帰り道は麻生の妄想デートを三通りくらい適当に聞き流しながら家に向かった。

この時点で非日常に突入したとはさすがに気がつかなかった。俺

偶然という名の奇跡～愛の記憶喪失～

もまだ十五歳だし、習わぬ経を読んだところで所詮門前の小僧は小僧以外の何者でもなかったようで、圧倒的に経験値が足りなかったね。

月曜日

あれから三回太陽が昇り、月曜日になった。また今日も同じことの繰り返しになるのかと思うと解りやすく憂鬱になった。頭では嫌がっているのに、なぜか身体は学校に行く気満々なようで、今日は朝五時に目が覚めた。もう一度布団にもぐりこんだが、全然眠れそうになかったので、起きることにした。

やはり脳と身体は別の動きをするということを変更して感じる事が出来た。脳が身体を動かしているのは、今では子供でも知っているような内容だが、実際、脳は100%身体を動かしているわけではない。だから筋肉痛やら肉離れやらが起こるのだ。脳が思っている以上の働きを身体がしてしまったり、脳の命令通りに身体が動けなかったりするから関節やら筋やらを痛めたりするのだ。

何でこんなことを突然思ったかというのを隠そう、現在俺は絶対贅筋肉痛中だからだ。土日は溜まっていた掃除や洗濯を一気にやった。全く自分の性格を呪うね。

いつも通りの掃除や洗濯でやめておけばよかったのだ。実際いつもより汚れていたのだからいつも通りとはいかないのかもしれないが、だからって模様替えじみたマネなどしなくても良かったはずだ。結構一生懸命になってしまった。普段やらないようなところにも手を伸ばしているうちに、家具の下にまで行き着き、タンスを移動してまで掃除をした。

しかもそのあと冷蔵庫の中身が少しもないことに気が付いて、疲れ切った身体に鞭を打って買い物に出かけた。しかもタイムサービ

入中でえらく買い込んでしまったのである。

おそらくこの二つの要因により身体中がオーバーワーク状態なのである。

朝食を終え、学校の支度を終えた俺は、出発に時間より三十分以上早かったのだが、筋肉痛のこともあったし、家にいてもすることもなかったので、学校に向かった。

学校に着くとすでに麻生が教室にいた。机に突っ伏しているからよくは分かりかねるがどこか元気なさそうに見えなくもない気がするようなしないような。どうやらこっちに気付いてもいないようなので話しかけてみよう。

「どうした？女にでも振られたのか？」

こう言うと、麻生はゆるーっくりこっちを見てゆるーくりもう一度元の位置に顔を戻した。無視されたのかと思って、また何か言ってるのかと思ったら、麻生は、本当は話したくないけれど仕方なく話している、というような声でこう言った。

「やさかした」

正直このセリフをあんなに落ち込んだような姿で言われたら、受験に失敗した浪人生を思い出さざるを得なかった。

これでは話が進まない。本当は聞かないほうがいいのかも知れないが、せっかく答えてくれたのだからちゃんと聞いてやったほうがいい気がした。

「何をやらかしたって？」

俺は全く顔を上げない麻生に向かってこう聞き返した。すると麻生はうめくような声で、デート、と言うとまた黙り込んでしまった。

その言葉を聞いて俺は土日の掃除とともに綺麗さっぱり片付けてしまった金曜日の麻生との会話を思い出した。そういえばデートに行くとか言っていたな。それに失敗して落ち込んでいたのか。さっきの挨拶はまづかった。

そのあと俺がいくつか質問をすると、麻生は単語じみた返答をよこした。その辺のやり取りも面倒なので謹んで割愛させていたただくとして、麻生の単語風返答を纏めると大体以下のようなになる。

土曜日は会っていないが二人はずっとメールを交換していて、お互いデートを楽しみにしていた。

当日は昼前から会う約束だったのだが、朝はメールをしなかったという。そして集合時間の一時間前に待ち合わせ場所に着いてしまった麻生は、デートのシミュレーションを繰り返していたのだが、相手は集合時間を過ぎてても一向に来ず、一時間過ぎ、二時間過ぎ、結局五時間ほど待ったのだが結局来なかったらしい。

つまり、

「すっぽかされたのか」

まあなんとというか、あれだね、憐れ。憐れの代名詞のような状況だ。これが憐れでなければ、全国の辞書を書き換えなければならぬ。

「どうしたんですか？」

声をかけてきたのは、岩崎だった。

この女子は幼馴染でもなんでもない。高校に入ってから知り合った。

しかしこいつも麻生も同じで、知り合うきっかけなどなかったと思う。気が付いたらそこにいて世話を焼いていたような気がする。ちなみに同級生である。言葉使いが丁寧なのは先輩だからでも師匠だからでもない。ではなぜだというと、聞いてないから解らないし、これからも聞く気もない。さらに興味もない。

今日も今日とてその世話好きな性格を如何なく発揮し、こうしてちよっかいを出してきたのである。

「また麻生さんをいじめているんですか？ママ許しませんよ！」

「誰がママだ。勘違いするな。俺のせいどころなってるんじゃない」

じゃ、誰のせいか？とは聞くな。俺には解らないから。しいて言うなら麻生本人のせいだろう。俺の勘じゃ、どうせ気付かないうちになにか相手を怒らせるようなことを言ったりしたりしたのだろう。

「じゃあ麻生さんはどうしたんですか？」

こいつの声色からは心配や同情といった憐れんだ感情は欠片も感知することができない。あるのは好奇心だけだ。なにか面白いことを期待しているに違いない。

とはいえ黙っていると俺のせいになれかねないので、麻生に了解を得てから、今日までの経緯を話した。

「そうだったんですか・・・」

岩崎は納得の声を上げて、それから、きつと急な用事が入ったんですよ、とか、昨日は罪悪感で眠れなかったはずですよ、とか言っただけで慰め始めた。

しかし当事者である麻生は机に伏せたまま、黙り込んでいた。

「ちょっと！成瀬さんも励ましてあげて下さいよ！」

岩崎が顔を近づけてきて、小声で俺に言った。俺がなにか言ったところでどうにかなると思えなかったのだが、このままだということも以上に鬱陶しいし、まあ慰めの言葉の一つでもかけてやるか。

「元気を出せ。失恋なんてたいしたことない。よくあることじゃないか。今日の朝刊見たか？大手電化製品メーカーの代表取締役が自宅で殺されたらしい。全く可愛そうなことじゃないか。それに比べたらお前の悩みなんて・・・」

月とすっぱんだ、と続けようとしたが、岩崎に止められた。

「何言ってるんですか！ちゃんと励ましてあげて下さい」

と、小声で岩崎に怒られた。

「う、ううう・・・」

こんなうめき声を漏らしたのは麻生だった。一見泣いてるように思える。実際岩崎は、ほら泣いちゃったじゃないですか、とか言うてちよっと困惑顔をしている。

だが、俺はそんなことちっとも考えなかった。こんなことで泣くようなやつじゃないし。そして俺は漠然と嫌な予感がした。

実際泣いてなかったこともその嫌な予感の正体もこの直後に解った。

「ううううううううううううおおおー」

叫んだ。見事に叫んだ。当然のごとく、教室にいたクラスメートたちが驚き、こちら、というか麻生に妙な視線を送っていた。岩崎も驚いていた。

俺はというと呆れただけで、べつに驚きはしなかった。全く周りの迷惑というものと考えないやつだ。お前はいいかもしれないけど、こうして一緒にいる俺たちの身にもなってもらいたいね。お前と同じく変なやつだと思われたらどうするんだ。

思わずため息をついた俺の気持ちを知ってか知らずか、また叫んだ。

「黙って聞いてりゃ好き勝手言いたいこと言いやがって！お前に俺のこの痛々しい気持ちがあつてたまるか！心の痛みを分かってたまるか！大手電化製品メーカーの代表取締役が殺されたって？大手の代表取締役なんてなあ、どうせ相当悪いことして金稼いだんだから殺されて当たり前なんだよ！誰にも文句言えないんだよ！」

「いったいどんな偏見だろうか。こいつはおそらくねたんでいるに違いない。しかし代表取締役も死んでしまったのになんだったってこんな一高校生にここまで言われなきゃいけないんだらうか。人知れず同情してしまうね。」

「俺はあきらめん、あきらめんぞお！」

「そうです！その意気ですよ！」

なぜか知らないうちに岩崎が呆然から復活していて、麻生と一緒に乗り気である。二人とも声がでかいのだが、意気投合してさらにでかくなった気がする。これが干渉というやつか。いや、声は音波なのだから干渉は起こりうるのだらうが、今回の場合、強め合っているばかりで、弱め合っている箇所がない。この場合、相乗効果というのが妥当だろうな。

気合を入れた二人は勢いよく教室を飛び出していった。当然俺は付いていかなかったが、教室にはいやーな空気といやーな視線が残っており、それらを一人で受けることができず、結局いそいそと教室から退散することになった。

適当にぶらついて、授業が始まる直前に帰ってきたら、すでに二人は教室にいた。

それから二人はなにかこそこそやっているような雰囲気をかもし出していた。授業中に何やら話し合っていたり、昼休みや授業の間の短い休み時間にもどこか行っていた。どうやら二人で何かを企んでいるようだった。俺は心の底から関わりたくないと思った。

放課後、帰り支度をしていると、例の二人がすっかり支度を終え、俺のところに来た。最近ではすっかり日常に本当におかしなことが起こったのはこのあとだ。

いつものように校門を出る。校門を出ると道が三つに分かれている。電車通学をしている俺たちは、正面の道に行く。ひたすら真っ直ぐ、十分ほど歩くと、最寄り駅に着く。俺たちは慣れた手つきで、定期を自動改札に通し、構内へ入った。

気味が悪いことに学校から今までの十五分弱、二人は一言も口を利かなかった。二、三分ほどすると電車が到着。俺たちはあまりいない車内へ乗り込んだ。電車が走り出してしばらくすると、ずっと閉じたままだった岩崎の口が静かに開いた。

「私たち朝のホームルーム前に教室から出て行きましたよね？」

「ああ、そうだったな」

俺は二人が勢いよく教室を出て行ったのを頭に思い浮かべた。

「あの時笹倉さんのクラスに行ってたんです」

なるほどね。気合を入れたのはそういうわけか。で、要件はなんだったんだ？待ち合わせに来なかった理由でも問いに行ったのか、それとも、麻生の気持ちでも伝えに行ったのか。

「でも笹倉さんはいませんでした」

「まだ来てなかっただけじゃないのか？」

この二人もそう思ったらしく、ここで諦めなかったようだ。

「私たちもそう思ったので、授業が終わる度に行ってみました。でも放課後まで笹倉さんは現れませんでした」

昼休みは職員室まで足を運び、笹倉から欠席の連絡がないかも調べに行ったらしい。それにしてもこの短い間にずいぶん話が進んでるな。

「それで休んでた理由は分かったのか？」

「いえ……。連絡は来てなかったそうなので結局笹倉さんが休んだ理由は分かりませんでした」

いろいろ動いていたようだが、最終的にほしい情報は得られなかったみたいだ。俺は一生懸命頑張ったらしい二人に同情の言葉でもかけてやるうと一つ二つ考えたが、その言葉に出番はなかった。

岩崎は、でも、と言い、続けてこんなことを言った。

「笹倉さんの家の住所を聞いてきました」

……。俺は無言にならざるを得なかった。ここまでやるか、普通。明日になればまた会えるかもしれない人に対して。これは誰の発案だ？どうも岩崎のような気がするね。麻生はさつきから黙って話を聞いているだけだし。

俺は岩崎の言葉に答えることができずに黙っていた。この間も電車は休むことなく進み続けた。そして駅に止まる。どうやら結構長い間話していたようで、もう俺の降りるべき駅の二つ前まで来ていた。ちなみに麻生の降りる駅は俺と同じで、岩崎はその一つ先だ。つまり俺たち三人の中でこの駅で降りるやつはいない。

しかし俺以外の二人は降りようとしている。降りるのか、と聞こうとして口を開きかけたのだが、それよりも一瞬早く岩崎がこう言った。

「だから今から笹倉さん家に行こうと思います」「はっ?」

思わず叫んでしまった。しかし岩崎はそんなことお構いなしに俺の手を取ると、開いているドアから電車を降りた。驚いたままの表情をしている俺の後ろで電車のドアが閉まった。

「お前、いったい何考えてるんだ?」

こう言ったのは俺だ。そしてこの問いかけに岩崎は、

「麻生さんと笹倉さんのことですよ、いけませんか?」

と言い、可愛らしく微笑んだ。

呆れた。俺は思わずため息をついた。今日はどうやら運が悪いらしい。断固反対して、ここに残ることも考えたが無意味な気がして、仕様がなないと割り切った。

「ここからそんなに遠くありません!さあ行きましょう!」

そう言って元気よく歩き始めた岩崎の天使のような笑顔を見て、俺はなぜだか白雪姫に出てくる魔女を思い出した。

元気よく歩く岩崎、少し緊張気味の麻生、それに続きやる気のない俺。

往生際が悪いのは解っているが、駅から刻一刻と目的地に向かっている現在になっても帰れるものなら今すぐ帰りたいと思う。先頭を歩く岩崎の手には、いったいいつ手に入れたのか、地図が握られている。少しでも迷ったら即刻帰ってやろうと思っっているのだが、岩崎の足取りは相変わらず軽快だ。

行くなら二人で行けばいいものをなんで俺が同行しなくてはならないんだ。正直言って俺が行ったところでもできることもない。というかこいつらはいったい何をしに行くのだろうか。

淀みなく動き続けていた岩崎の足がはたと止まる。とうとう迷ったのかと岩崎が思ったが残念なことにこう言った。

「着きました。ここですよ」

岩崎の示した指の先にはアパートだかマンションだか微妙な建物があった。

岩崎は俺たちに部屋番号を教えた。どうやら結構階段を上りそうである。

しかしそうはならなかった。そのマンションにはオートロックが備え付けてあったのだ。なってしまうので、あまりおかしなことではない。麻生は俺たちを見た。

俺は何もしなかったのだが、岩崎は、頑張れ、というようなポーズを取っているのを目の端で捕えた。麻生はそれにうなずいて答えた。その場を妙な緊張が支配する。そんな中、麻生は岩崎が言った部屋番号を押した。が、返事はない。もう一度押してみる。が、返

事はない。少しずつその場を支配していた緊張感が薄らいでいくのが分かった。代わりに諦めの色がだんだん濃さを増していく。

「どうやら留守みたいだ」

麻生がこう言うと、岩崎は、

「すぐ帰ってくるかもしれません。少し待ってみましょう」

と、言った。麻生はこの言葉に賛成した。俺はもちろん反対だったが二対一で待つことが決定した。そのときすでに時計の針は午後六時を回っていた。

それから一時間以上待つてみたが未だホシは現れない。ロビーは暖房が効いていたから寒いということはなかったが、すっかり陽は落ち、外は真っ暗になっていた。

笹倉本人は当然帰ってきていないし、顔を知らない笹倉家の住人も、インターホンに出ないところを見ると、まだ帰ってきてないらしい。

だが、笹倉家の住人以外のマンションの住人は続々と帰宅してきた。

こんなところでたむろしている、おそらく見たこともないであろう俺たちに疑いの眼差しを向けてくる。

今のところ証拠不十分で見逃してくれているようだが、話を聞く前に警察に通報するような強行派がいつ現れるか分からない。当人である俺の目から見ても俺たちは相当怪しい。正直言って一人だ

つたら確実にストーカーに間違えられる。いや、俺と麻生の二人でも十分に間違えられるかもしれない。なぜだか解らないが、黒幕である岩崎に感謝の言葉を送りたくなってきた。

そろそろまずい。限界だ。このままではいつ正気を失ってもおかしくない。俺は精神的に強い人間ではないんだ。

「そろそろ撤収しよう。もう結構な時間だ」

耐え切れなくなっ言ってみただが、二人は意外なくらいあっさり賛成した。どうやら誰かがこう切り出すのを待っていたようだ。

外の空気はすっかり冷え込んでいた。三人が吐く息は白く濁り、時折強く吹く風はとても冷たかった。

そんな寒さを振り払うかのように帰りは二人ともよくしゃべり、賑やかだった。おそらく妄想であろう身の上話を楽しそうにする麻生と、それを興味深そうに聞いている岩崎を見て、悔しいことに、こんな日も悪くないかなと思ってしまった。

二人と別れて一人になり自然と早足になる帰り道、俺は考え事をしていた。それは夕飯のことでも、その他の家事のことでも、学校のことでもなく、笹倉のことだった。自分でも意外だったが、今どこにいるのか、とても気になった。心配していたわけじゃない。もちろん、麻生とのことも関係ない。ただ漠然とどこにいるのか、何をしているのかが気になった。

これはあとから思ったことなのだが、この漠然と居場所が気になったのが虫の知らせというやつだったのでないか、と。実際この

ことは後に回収されるべき伏線だったのだ。このときはまだ俺には知るべき手段がなかったのだが。

俺はなんでこんなこと気になったのか考えていたのだが、途中で面倒になった。心のどこかで心配しているのだからということにして考えるのをやめた。

それからはいつものように夕飯のことを考えた。今日はいつもより余計に歩いたし、普段は浴びないような視線をいやというほど浴びて、精神的にも肉体的にも疲労困憊だったので、簡単に済ませることにした。そんなことを考えているうちに家であるマンションに着いた。

このマンションは中々高級で少なくとも高校生が一人暮らしをするようなところではない。もちろん俺が選んだわけではない。俺は実家を選んだところに来ただけだ。こんなガキにこんなマンションを用意するなんて実家はよほど金が余っているらしい。オートロックを開錠し、中に入り、エレベーターに乗り込む。自分の部屋がある階のボタンを押すと、ドアが静かに閉じた。

しばらくして到着を告げる安い機械音が鳴り、ドアが開く。俺は疲れきった身体を、もう少しだ、と励ましながら自分の部屋へと歩き出す。

そこでふと気が付く。

俺の家の前に一人の女性　俺と変わらないくらいの年齢に見える　が立っていた。俺の見間違いだと思ったが、部屋番号は疑いようもなくうちの番号だ。声をかけようとしたがそれは躊躇われた。相手の意図が分からない。少し離れたところから様子を見ていたら

その視線に気が付いたようでその女性がこちらに向き直った。俺は驚いた。結構驚いた。俺はこの女性のことを知っていた。

「笹倉京子……」

俺はその名前を思わず口に出してしまった。本来ならそこにいるはずがないのだが、その姿形は見紛うことなく彼女だった。

俺は混乱した。探していた人物が見つかったのだから、ここは喜ぶべきところなのかもしれないが、全然そうは思えなかった。なぜ笹倉がここにいる？今までどこにいた？どういう過程でここに来たんだ。

俺の頭の中には解決できない疑問がいくつもいくつも浮かんでくる。落ち着け。とりあえず話しかけてみよう。

「あんたは笹倉京子だよな？」

やはり俺は混乱していたようだ。なんでこんな質問をしたんだ。そんなことは当たり前じゃないか。

とりあえず麻生に連絡してやろう。ついでだから岩崎のやつも呼んでやろう。だが笹倉は、こんなことを考えられるくらいに回復した俺の頭を再び大きな混乱の中に陥れることを言った。

「私、笹倉京子って言うんですか？」

眩暈がした。

火曜日

「あの後何もなかったよな？」

「あの後何もありませんでしたよな？」

ホームルーム開始のチャイムギリギリに教室に入った俺が、ドアを開けて最初に聞いた言葉は、麻生と岩崎のハモった上記の台詞だった。

俺は自然とため息が出る。やれやれだ。こつこつちの思惑通りに動いてくるとはね。しかしここは返事をしないと何かあったことにされかねない。

「ああ。何も、が何を指しているのか解らないが、いつも通りだったよ」

「本当ですか？何か隠してませんか？」

「何も隠してない。ほら、もうホームルームが始まるぞ」

岩崎と麻生はチツと舌打ちをすると、昼休みは事情聴取だからなとなんとも不吉な捨て台詞を吐いて席に着いた。面倒だとは思うがこれは説明しなきゃいけないだろうな。どっちかっていうと俺より麻生のほうが当事者だからな。

席に着いた俺は昨日のことを思い出していた。二人が言う、あの後、とは昨日の出来事の続きである。

結局俺は二人を家に呼んだのだ。それは俺一人じゃどうしようもないからではなく、要するに隠しておくともっと面倒なことになると思ったからである。今も面倒だがやはり俺は最善から二番目くら

いのことをしたんだと思う。最善がなんだか解らないが・・・。

笹倉の驚きの一言を聞き、俺はしばらく茫然自失状態だったが、秋の夜風のおかげでオーバーヒート寸前だった俺の頭は冷え、どうにか落ち着きをとり戻し、笹倉を部屋の中に通した。そして二人に連絡を入れた。

二人に連絡した三十分後、先に麻生、それにちよいと遅れて岩崎が登場した。なにやら困惑しているようだ。

俺は二人への連絡手段としてメールを用いた。送った内容は、急いでうちに来い、とただ一言。電話も考えたが説明が面倒だし、どう説明してもよく分からないことになりそうだから、とにかく来てもらって自分の目で状況を見てもらおうと思ったのだ。俺の要請どおりに急いで来たようだが、現状が理解できていないらしい。

二人はリビングの椅子に座った。俺一人が立っているという状態になる。そして待ちわびたのか岩崎が、確信に迫る質問をしてきた。

「急いでうちに来いってどういうことですか？」

さっそくだな、と思ったが俺は呼んだ理由を完結に分かりやすく説明した。

「笹倉京子を発見した」

「えっ！」

「本当ですか？」

「本当だ。しかし少々厄介な状況になってるな」

二人はいつたん喜んだ表情を見せたが、一気に複雑な表情になった。気持ちは解るけどね。

「どういうことだ？怪我でもしているのか？」

「いや、外傷はない」

「どういうことですか？もったいぶってないで説明して下さい」

俺がどう説明したらいいか悩んでいると、二人の視線が凍りつく。見ているのは俺じゃない。俺の後ろに二人の口を黙らせた元凶がいるらしい。俺にはなんとなく予想が付く。

俺が振り返ると、偶然か、それとも俺のまどろっこしい説明に見かねたのか、わざと状況を混乱させようとしたのか分からないが、本人が登場した。明らかに風呂上りの格好で。いったいなんでこの状況で上がってくるんだ？わざとじゃないのか？

三人はそれぞれ違う表情で笹倉を迎えた。岩崎は驚愕&怒り、麻生はシヨック百%。俺はため息。

空気が違うのを感じ取ったのか、笹倉は俺の背中に隠れた。風呂上りなだけあって、顔はほんのり上気していた。髪はしっとり濡れていて、ノーマルな状態より大人っぽい。

だが、笹倉の大人の色香もこの状況には対抗できなかつたらしい。驚愕の部分がなくなり、純度百%怒りモードの岩崎が殺意交じりに俺に質問。

「成瀬さん！どういうことですか？行方不明者捕まえて家に連れ込んだ拳句、お風呂にまで入れるなんて！何考えてるんですか！この

後何をしようとしたんですか！」

「少し落ち着いて俺の話を聞け！」

「これが落ち着いてられる状況ですか！不潔です！汚いです！最低です！」

ふう……。これじゃ話も出来ないね。ここは元凶であるこの人にこの状況を打開してもらいましょうかね。

俺は、俺の背中に隠れたままの笹倉に問いかけた。

「この二人のこと覚えているか？」

この質問に岩崎は、あからさまに何言っただこいつ？という表情になった。いつの間にか復活している麻生は笹倉のことを見つめていた。

そして笹倉の返答。

「ごめんなさい、覚えてません」

啞然。二人の表情はまさに啞然としか言いようがなかった。やっとともに話ができる状況になった。

この笹倉の一言でやっと事態の深刻さに気付いたようで二人の表情が変わった。

真剣になったようだ。

ちよいとまじめな話をするため、笹倉には席をはずしてもらった。

「どういうことなんですか？本当に記憶喪失なんですか？成瀬さんと何か企んだりしてるんじゃないんですか？」

さっきの風呂上りの登場がよっぽど利いているらしい。俺と笹倉との間に何かあったと思わずにはいられないようだ。しかしそう考
えるとおかしくなる。

「もしそうだとしたら、どっからが狂言になる？」

学校に来なかったことや家にいなかったこと。一番は家に母親ま
でいなかったことだ。笹倉の家に行こうと言い出したのは岩崎であ
る。なのに俺がここまで仕込むのは少々無理がある。

「そうですね。成瀬さんはそんな面倒なことやらないですよね」
変なところで納得されたようだ。ま、当たってるけどね。

「そうすると本当に記憶喪失なのか？」

「さあな。ただすべての記憶をなくしてしまっただけじゃなさそう
だ。記憶障害とでもいったらいいのか。俺たちにはなんとも言えな
いだろう。専門家じゃないし。まあ笹倉が嘘をついている可能性は
なくはないな」

「そんなことは絶対ない。笹倉さんは嘘をつかない人だ」

こいつの言っていることは理想とかそんな感じのニュアンスが含
まれている気がする。が、俺もその辺は同意できる。俺の場合は勘
だけ。

「とりあえず今のところはなんとも言えん。もっと状況を理解しな

いと」

情報が足りなさ過ぎる。これではどれだけ話し合っても憶測の域を超えない。なら、話し合いに意味はない。今日のところは解散だな。

「また明日にでもいろいろ調べてみよう。今日は解散」

「笹倉さんはどうするんですか？」

「うちに泊めるしかないだろう」

こう言うと二人はものすごい反対してきた。衛生上とか教育上とかいう単語を使ってもっともらしいことを言っていたが、最終的に俺のこと質問で黙らせた。

「じゃあ他にどこにやるんだ？」

「それは・・・私は寮ですから無理ですし、麻生さんは実家暮らしで説明するのが大変だし。じゃあホテルとか？」

「金は一銭も持ってないそうだし」

「私たちが貸して差し上げればいいんじゃないですか？」

「俺は遠慮する」

そして岩崎は、うーん、と苦悩の声を上げてしぶしぶ了承した。

麻生は納得できないようで自分の家に連れて行くと言っていたが、そっちのが絶対に危ないと岩崎に阻止されていた。

さっき二人が俺に聞いていた、あの後、とはここから先の話である。

午前中の授業は、なんとも退屈だったが、昼休みの事情聴衆のことを考えると長く続いてほしいと思った。しかしこういうときに限って四限が自習になってしまふのである。これは儲けたとばかりに二人は俺の席の周りを囲む。

「さあさっきの続きをしましょう!」

「ごまかしたりしたら即逮捕だからな」

やれやれ。他人のことにやたらと首を突っ込みたがる奴らだ。麻生はいいが、岩崎はなんでそんなに燃えているのだろうか。いまいち不明だが、当初の通り黙っていると後々面倒を引き起こすことは火を見るより明らかかわけだし、別段隠さなくてはいけないようなこともないので、俺はのんびり話し始めた。

二人を見送ると、俺は重い足取りで家の中に戻った。するとリビングがなにやら暗い。いや、照明が点いているのだが、照明の問題ではない。要はそこにいる人物の気分の問題である。俺も気分的にはうつつむきたいのだが、俺のことは置いておいて、笹倉がそうしていた。

「どうした?」

「あの、お二人ともすごい怒られていたようですが、やはり私のせいなのでしょうか?」

俺の問いかけに笹倉はうつつむいていた顔を上げて答えた。どうやら俺が怒鳴られていたことに対して責任を感じているようだ。

「気にするな。それより本当に俺ら三人に、いや誰か一人でもいい。見覚えはないか?」

笹倉は申し訳なさそうに一言、すみません、とだけ言った。

話を聞いてみると、自分の記憶には曖昧なところが多々あり、その曖昧な記憶も映像ではなく、静止画のように断片的にしか思い出せない。

俺が思うに最近、何かとてもショックな出来事があり、その出来事を脳が覚えることを拒否し、その副作用か何かでいろいろな記憶を巻き込み、忘れてしまった。そんな感じだと想う。

そこで素朴な疑問を思い出す。

「なんでここに来たんだ？」

笹倉は俺の部屋の玄関の前にいた。マンションの前ではなく、俺の部屋の前に。つまり俺の部屋を指していたんだろう。

「このことは覚えていました」

確かに以前笹倉はここに来たことがある。麻生が、焼肉パーティーをやるから一人暮らしである俺の部屋を貸せ、というかなり強引で一方的だったが、ここが会場になったことがある。そこに笹倉もいた。だから前世（ここでは記憶障害になる前のこと）の笹倉はここを知っているはずだ。

「結構鮮明に覚えていたからここが自分の家なのかと思って・・・」

なるほどね。なんとなくだが、状況が分かってきた。よく知らないが、こういった場合、勝手に思い出すのを待つしかないような気

がする。しばらく待ってみてそれでも記憶が戻らなければ病院に行こうかな。

俺が考え込んでいるのを見て不安になったのか、笹倉が声をかけた。

「あの、やっぱり私がここにいちゃ、迷惑ですよね・・・？」

まあまったく迷惑じゃないといったら嘘になる。しかし追い出すことはできないし、追い出して本格的に失踪されても困る。本来の家の鍵は持っていないようだし、記憶が戻るまではうちに置いておくしかないだろう。

「とりあえず記憶が戻るまでここにいていいよ。狭い家だが好きに使ってくれ」

俺がそう言うと、申し訳なさそうにしていた暗い顔からとてもいい笑顔になった。なんだかんだ言って心配していたらしい。やはり記憶がないのは不安だろう。彼女にとつてうちは唯一の手がかりだったに違いない。そこを追い出されたら彼女は後がない。とはいえ、全く知らない（ちなみに前世もお互いよく知らない）男の家に簡単に泊まっていいのだろうか。岩崎じゃないが、そんなことを考えてしまった。

それから笹倉はとてもいい笑顔のまま顔を近づけてきて、私とあなたたちはどういう関係なの？と聞いてきた。面倒だったが、ここに来てからずっと借りられて来た猫のように不安そうな顔しかしてなかったから、断るなど思い浮かばなかった。

しばらく笹倉が質問して俺が答えるという簡単な質疑応答が続い

た。何回かそれを繰り返したあと、適当に寝た。俺のベッドは笹倉に貸し出し、俺はソファで寝た。

「話は以上だ」

つまらない話を終え、俺はペットボトルのお茶を口に含んだ。しやべるといふ作業は本当にのどが渇くな。

ふと二人を見るとなにやら不満そうである。

「なんだ？不満でもあるのか？」

「今の話で全部ですか？」

「どういう意味だ？」

「大事なところを割愛してないですか？隠してないですか？」

「なんか隠しているのか？そうなのか？」

絶叫したのは麻生だ。昨日から精神状態が芳しくない。情緒不安定である。しかも寝不足なようだ。クマできてるし。こいつは意外にもネガティブ思考なようだ。

「割愛してないし、隠してない。今の話はかなり忠実なノンフィクションだ」

二人は信じられないようだが、しぶしぶ納得した。

「それで笹倉さんの様子はどうですか？原因とか解りますか？」

「俺にはさっぱりだな。全く思い出さなそうでもあるが、あっさり思い出しそうでもある」

「つまり全く解らないと？」

岩崎の声には非難の色が混ざっている。どう答えようか迷ったが、素直に答えることにした。

「しょうがないだろ。今俺が言えるのは、外傷が全くないから原因は精神的なものだということくらいだ。外的要因ならば外科処置を施すことで何らかの変化があるかもしれないが内的要因にはそれは無意味だ。できることは待つことしかない」

催眠術という手があるかもしれないが思い出したくないから記憶を奥の引き出しにしまいこんでしまったのだ。無理矢理思い出させるようなマネは好ましくないような気がする。それに催眠術師に心当たりがない。

「まあ完全に記憶がなくなったわけじゃない。そのうち思い出すだろう」

「じゃあ待っているだけなんですか？」

「たぶんな。原因が解ればあるいは・・・」

何とかなるかもしれないこともなくはないだろうよ、と言いかけたところで、バン！という音に遮られた。音のした方を見ると岩崎が立ち上がり、机に両手を置いている。おそらくバン！という音は岩崎が机をぶつ叩いた音だろう。

「なんだ？」

と聞くと岩崎はゆっくり俺のほうを見る目が輝いている。その顔は退屈していたときに不可解な事件の依頼を受けたシャーロック・ホームズのような感じだった。

俺はその顔にいやな予感を感じざるを得なかった。

「なにか思いついたのか？」

「ええ！とてもいい事思いつきました！」

誰にとつていい事なのかは不明だが、なんとなく俺にとってはよくないことである気がするね。

結果からいうと俺の当たってほしくない予感は見事的中して岩崎は俺にとつてよくないことを提案した。

岩崎はこほんと咳払いを一つして、自慢げにこう言い放った。

「私たちが原因を探し出して笹倉さんを救出してあげましょう！！名づけて『笹倉さんの記憶傷害の原因を探し出し笹倉さんの記憶を取り戻そう大作戦！』」

……。呆れて何も言えん。こいつはバカか？突っ込みどころが多すぎて突っ込む気にもならないね。とりあえずこれだけは聞いておこう。

「その作戦は誰がやるんだ？」

「もちろん私たち三人に決まってるじゃないですか！」

「その三人の中には俺も入ってるのか？」

「当たり前じゃないですか！なに言ってるんですか！麻生さんも当然やりますよね？」

「おう！その作戦乗った！」

……。もはやため息すら出ない。なぜこの二人はこうまでやる

気なのか。考えてみたが五秒でやめた。いくら考えてもこいつらの思考はトレースできないのである。できないことをやるのは時間の無駄だ。

「じゃあまずは本人に話を聞きにいきましょう」

岩崎のその言葉に麻生が、そうしよう、と賛成した。

「話って何を聞くんだった？」

「いろいろですよ。じゃあ今日は成瀬さんちに泊まりで」

「なんでそうなる？」

「時間はたくさんあったほうがいいですよ」

興奮し暴走した岩崎をなだめて説得した結果、なんとか泊まりだけは回避したが、その代償として夕飯を作ってやることになった。

よく、一人分作るのも二人分作るのも大して変わらないというが、さすがに二人分と四人分ではかかる手間も材料の量も違う。

麻生と岩崎は一回帰ってから来るということで俺は現在一人で近くのスーパーにきている。ずうずうしくも二人してメニューに注文をつけてきたので買い足さなければいけなくなった。俺の料理のレパートリーを知っているのかと思うくらい、二人とも俺が作れる料理ばかりを注文してきた。ちっ、作れないものだったらよかったものを……。

「ただいま」

俺は鍵を開け、家の中に入った。もう空は暗くなり始めた午後五時前。部屋の中は一つの明かりもついておらず、外と同じく、闇に

包まれていた。

俺は明かりをつけて部屋の中心に向かうと、リビングのソファで寝息を立てている笹倉がいた。

あの頬には一筋涙のあとがある。泣き疲れて眠ってしまったのか、あるいは夢の中で泣いているのか、俺には確かめようもないが、その姿を見て俺は記憶を取り戻してやりたいと思った。こいつはたかさんのことを忘れてしまった。普通に振舞っていたが、どこか心の奥深いところで苦しんでいる。忘れてしまったことを悲しんでいるのだ。

俺はつけた明かりをまた消し、そこらへんにあった笹倉の上着をかけてやった。せめて寝ているときくらいいい夢を見てもらいたいね。

俺は寝室に行き、制服から家着に着替えた。そして暗いままのリビングに行き、笹倉の泣き寝顔を見ながら考えた。やはり記憶を取りもどすための鍵は原因にあるはずだ。だが俺は笹倉についてほとんど何も知らない。おそらく原因であろう、見たり聞いたりして精神的ショックを与えた内容は想像もつかない。

友達や家族関係なのか、勉強なのか、それとも笹倉にしかわからないことなのか。どれかジャンルが特定できればあるいは突破口になるかもしれないのだが……。

ピンポン

そこまで思案したところで玄関のチャイムが鳴った。誰が来たのか、おそらく二人のどちらかもしくは両方だろう。インターフォンには出ずに直接玄関に向かい、ドアを開けると予想通りの二人がい

た。

「あーーーーー」

突然岩崎が叫んだ。やめろ、近所迷惑だろ！

「何だよ」

「何で電気つけてないんですか！真つ暗な部屋で年頃の男女が二人で何をやっていたんですか！」

なにを意味不明なことを……。

「てめえ、成瀬このやろ！」

これに麻生が乗ってしまった。こいつは笹倉絡みになると本当に冗談が通じなくなるな。

「不潔です、汚いです、最低です！」

こいつもなんでいつもそっちの方向に持っていくんだ。というか持っていけるんだ？関心に値するね。

「勘違いするな。笹倉が眠っているからつけていないだけだ」

俺がこう言ったのとはほぼ同時に、んーーーー、という声が部屋の中から聞こえてきた。どうやらこいつらの絶叫のせいで笹倉が起きたのだらう。

部屋の中に入ると笹倉が笑顔で迎えてくれた。

「お帰りなさい。夕食の準備とかしようと思ったんですけど寝ちゃってました」

言い終わると同時にあつといい俺の後ろに視線を送った。どうやら二人に気付いたらしい。

「あなたたちは昨日の・・・」

「昨日はすみませんでした。突然のことで私たちも混乱しちゃいます」

挨拶もそこそこに俺は二人を家の中に入れた。キッチンでコーヒを入れていた俺の耳に、リビングにいる岩崎が笹倉にこう言ったのが聞こえた。

「いえ！私のほうこそあなた方のことを覚えていなくて申し訳ありません」

「そんなことないよ」

笹倉の言葉に対応したのは麻生だ。麻生の声はいつもの声と違って真剣みを帯びている。

「記憶がないっていうことは本当につらいことだと思う。それに比べたら俺たちはつらいなんて言えないよ。笹倉さんの気持ち全部解ってあげられないけどなにかあつたら力になるから」

くさいね。聞いているこっちが恥ずかしくなるようなくさくてどうしようもない言葉だが、こいつは本心で言っている。そして本当

に笹倉の力になりたいと思っている。それが解るくらい麻生は真剣だった。

「……」
「……」

沈黙。解るけどね。あれだけこっ恥ずかしいせりふを真顔で言われたら、もう黙るしかないでしょ。言ったほうもおそらく羞恥心があとから出てきたのだろう。二の句をつなげないようだ。しかしそれでは何のために来たか分からんだろう。

「なに黙り込んでるんだよ。今日は何しに来たんだ？」
「そうでした！」

何がそうでした！だよ。あほか。

「笹倉さん。私たちはあなたが記憶を取り戻すためのお手伝い、その名も『笹倉さんの記憶傷害の原因を探し出し笹倉さんの記憶を取り戻そう大作戦！』を執行するために今日ここに来ました」

「は、はあ」

「今からいくつか質問をさせていただきます。解らないものは解らないとおっしゃっていただければけっこうです」

「解りました」

岩崎はこう断りを入れるとなにやら手帳のようなものを取り出してさっそく質問を始めた。質問の内容は簡単なものばかりだった。好きな食べ物や好きな教科、小学校のこと中学校のこと、そして高校のこと。

自分の性格や好みに関しては全く問題ないほどすらすら答えてい

た。日常生活に支障をきたすような喪失は全くなかった。

問題は記憶の部分だ。思い出と言いつてもいい。すべてを忘れていたわけではない。だが、映像として覚えている部分はほとんど無いという。その数少ない映像としても記憶がうちままでの道のりだそう。もっと他に忘れてはいけないことがあったと思うが。覚えているもののほとんどが静止画や写真のようにある一部分を切り取ったような風景だそう。旅行先の家族の笑顔とか、小学校の屋上からの風景とか、そういうのだ。

「昨日や今日のこととはつきり覚えているのか？」

「はい。完璧に復唱できないけど・・・」

俺の質問に笹倉はこう答えた。そりゃそう。正常な人間だってそんなことできない。そんなことできたらある意味異常だ。昨日の夕飯だって忘れるやつがいるわけだし。となるとやはり、

「日曜日に何をしていたかが鍵ですね」

岩崎が俺の考えを代弁してくれた。その辺に異論はないようだ。

「日曜のこと、覚えてないよな？」

これで覚えていたら飛躍的に前進するんだが、残念ながらいかやはりというか笹倉の答えはNOだった。

三人は仲良く黙り込んでしまった。

「まあ今日のところはこんなもんでいいんじゃないか？何か聴きたいことがあったらまた来るってことで」

この俺の案に三人は同意した。それから俺は夕飯の支度をし始め、その間三人はなにやらとても盛り上がりつつあったようだったが、内容はあまり良く聞こえなかった。なんとなくだが俺のことのような気がするね。

俺の料理を綺麗に平らげた三人は、今度は俺を交えた雑談に花を咲かせ、最終的にうちに泊まって行った。

水曜日

起きたら俺たちは四人仲良くリビングで寝ていた。時計を見ると朝六時。三人はまだ寝ている。

笹倉の寝顔は昨日と違い、少し楽しそうに見える。やかましくて寝かせてくれなかったが、昨日のこいつらの泊まりは笹倉には良かったのだろう。やはり記憶がないのはさびしいに違いない。記憶とは過去だ。過去とは自分自身。すべての記憶をなくしているわけではないが、自分を見失ってしまった時間があるのである。それはつらいに違いない。

俺は三人を起こさないようにリビングを出るとキッチンに向かった。まだ寝ててもいい時間だ。なるべく起こさないでおいであげよう。と、思った矢先、笹倉が突然覚醒した。なんでだ？生物時計か？

「お、おはよう」

なんかどもってしまった。

「おはよう！昨日は楽しかったね」

「そりゃ良かった」

「いつもあんな感じなの？」

「そうだな。俺にはあれは日常だ」

「そっか。うらやましいな」

「？」

困り顔の俺に向かって優しく微笑むと笹倉はカーテンを開けた。

外には出てきたばかりの朝日が輝いていた。

「今日はいいい天気だね」

「ああ、そうだな」

今日は文句なしの快晴だった。まるで今の笹倉の心の中を表しているような……。

「ねえ！まだ時間あるよね？ちよつと散歩しない」

俺と笹倉は適当に駅までの通りと歩いている。季節は完全に秋だし、朝早いのだが、驚くほど暖かった。それは天気だけのせいではないように思える。

「麻生君と仲良くなったのはいつごろ？」

「詳しく覚えていないが、たぶん年少のころだと思う」

「そっか！じゃ岩崎さんは？」

「さあね。気が付いたらいたとしか。高校からだよ、とりあえず」

「あはは！かわいそうだな、岩崎さん」

笹倉が質問して俺がそれに答える。こんな会話と言えないような会話をしながら歩いてきた。大した内容ではなかったが笹倉は終始笑顔だった。しかしほとんど休まずに質問をしていた笹倉が口を閉じた。顔は笑っていたが悲しそうな笑みだった。

「ねえ」

「どうした？」

「記憶が戻ったら昨日の記憶はどうなるのかな？消えちゃうのかな？」

「……」

「私昨日すごい楽しかった。人生で一番って言うてもうそじゃないくらい」

「そうか」

「もし昨日の記憶がなくなってしまうんだったら、私は今のままでもいいな」

俺は言葉に詰まってしまった。適当にうそをついてごまかすのは簡単だ。だが、そうすべきときではないことくらい俺にだって分かる。

「・・・」

最終的に俺は黙ることしかできなかった。そのまま沈黙が続き、朝の散歩は終わってしまった。マンションに着き、玄関を開けようとドアノブに手をかけると、勝手にドアが開いて俺はドアと正面からぶつかった。

「いってーいー」

中から岩崎が出てきた。

「成瀬さん！ いったいどこ行ってたんですか！ 私を差し置いて！ あと麻生さんも」

麻生は明らかに付け足しだったな。というかそんなことよりまず俺に謝るべきではないのか？

「笹倉さんも！ 成瀬さんにあまり近づかないほうがいいですよ。極度のめんどくさがりがうつりますから」

「こら！ 何勝手なこと言っただけやがる」

「別にいいですけどね！成瀬さんが誰と散歩しよう！」

こんなやり取りを見ていた笹倉が後ろで笑っていたような気がした。

なにやらご立腹の岩崎のせいであれだけ余裕があった時間もぎりぎりになってしまった。上記のごたごたは熟睡中だった麻生には知られていなかったようなのでとりあえずラッキーだったね。

笹倉を一人残して俺たち三人は家を出た。制服や荷物を取ってこなくてはならないため、麻生と岩崎は自宅と寮にそれぞれ向かった。というわけで俺は今一人で学校に向かっているのだが、うーん静かだ。高校に入ってからあいつらとつるむようになったのだが、最近は輪をかけてずっと一緒に居たからな。

そこでふと思いついたのは笹倉のセリフだった。俺は記憶が戻っても昨日や一昨日のことを忘れてたりしないと思うが、無責任なことはい言えない。やはり笹倉本人が望まないことはやらないほうがいいのかもしいない。だけど記憶がないのは嫌なことであって……。

結局のところ俺はどうしたらいいのか分からなくなっていた。

気が付いたら授業が全部終わって放課後になっていた。周りは部活に行ったり帰ったりで次々に教室から出て行ったが俺は帰る気にならなかった。

「成瀬さん帰りましょう！」

岩崎がとことこやってきてそう言った。麻生も一緒だった。

「悪いが先帰っててくれ」

「どうしたんですか？学校になんか用事ですか？」

「学校に用事はない」

「じゃなんですか？まさかナンパですか？ママ、許しませんよ！」

誰がママだ。

「そんなんじゃない」

「じゃなんですか？そういえば今日は一日ボーっとしてましたね。

悩み事ですか？」

「俺が抱えてる悩みなんていくつもないな」

「もしかして笹倉さんのことか？」

そつだ。さすが麻生。てか、もしかしたら麻生もそのことを考えていたのかもしれない。原因が分かれば何とかなるかもしれないが笹倉は今の環境を楽しんでいるようだ。記憶がかけていることはつらいかもしれないがこいつらとわいわいやるのが楽しいようなのだ。

とりあえず今できることは日曜日の出来事を突き止めること。それが分かった上で決断を下しても遅くないはずだ。しかし笹倉は日曜のことを覚えていない。しかも笹倉以外知らないことなのだ。だが笹倉が覚えていないなら自分たちで探すしかない。笹倉の行動を知るには目撃者を探すのが一番なのだが俺たちは警察じゃない。仮になにか手がかりになりそうな人物を探し当てたとしても一高校生である俺たちが職務質問なんてできるわけがない。ましてや任意同行なんて論外だ。とりあえずこいつに聞いてみることにする。

「麻生、お前が笹倉と会う約束をしていたのは日曜だったな？」

「そっか！日曜日といえばデートの日でしたね！」

「で、待ち合わせの時間は何時だ？」

「昼の十一時ジャスト」

「すると笹倉が起きてから十一時までの間に何らかの事件に巻き込まれた可能性が高い」

「どういうことですか？成瀬さん」

「簡単な話だ。約束の十一時よりあとだったら麻生との約束が優先される」

「それだけでは断定できません！笹倉さんは最初から行く気がなかったかもしれませんが。デートをお受けしたものの麻生さんの勢いに負けてとかがも」

麻生がこれを聞いて顔をしかめる。この可能性はあるね。だが、関係ない。

「じゃ聞くが、笹倉京子はドタキャンするようなやつか？」

「それは・・・」

「ないな！百分ない」

これには麻生が間髪いれずに否定した。だが、俺も同意見だ。

「なら最初から行く気がないってのもありえないな。そんな約束するわけがない。たとえ麻生の押しに負けたからだとしてもキャンセルするなら早めに連絡の二つや二つ入れるはずだ」

「でもそれなら約束の前でも連絡を入れてもおかしくないはずですよ。普通なら間に合わないと思うまで連絡はしないだろ。デートはしたいはずだからな。キャンセルしたらデートはなし。だったらギリギリまで粘ってもおかしくない。少なくとも笹倉なら麻生の気持ちを考えてキャンセルはなるべく避けようとするだろうな」

麻生が大きく首を縦に振り同意している様子を目の端で捕えたが、謹んで無視しておく。

「ほかに何か問題あるか？」

「いえ。でもその不測の事態っていったい何なのでしょう？」

さあね。そいつはまだ分からない。今の時点で分かることは何を犠牲にしてもそれを優先しなくてはならないようなことだ。少なくとも笹倉にとつては。

「成瀬！誘拐という線はないか？」

「私もそれ考えました」

麻生にしてはまともな意見だ。

「それは俺も考えた。可能性はある。だが、笹倉が開放されているということは身代金にしる、何にしる、もう決着がついてしまっているということになる。まさか人質に逃げられるへまはしないだろうからな。一度決着がついているなら。いまさら俺たちにできることはない。それに誘拐が原因なら笹倉に思い出させることは果たして正解なのか」

自分が誘拐されていた、なんてことは最大級にいやな思い出だろう。だからほかの記憶を巻き込んでどこか頭の奥のほうにしまいこんでしまったのだ。果たしてそんな記憶を思い出させて笹倉のためになるのか？

「うーん、そうですね」

「確かにためにならないかもな」

二人は俺の考えに賛成したようだ。

「ではもう作戦は終わりにしたほうが良いのでしょうか？」

「かもな」

「俺は降りるつもりはないね」

二人ともこの発言には驚いたようだ。確かにここで終わりにできたらどんなに楽だろうか。しかしこんな中途半端なところで終わるのもかつこ悪いだろう。それにこれ以上うちに笹倉を置いておくのもかわいそうだ。誰がかわいそうかというところ、もちろん笹倉と俺だ。だが一番の決め手はほかにある。

「どうしてですか？もし原因が誘拐だったらどうするんですか？」

「誘拐はない」

「なっ！さっき成瀬さん自身があるかもしれないって・・・」

「あくまで可能性の話だ。俺はほとんどゼロに近いと思うよ」

「どうしてですか？」

「日曜に誘拐されて、月曜に開放ってあると思うか？」

笹倉は月曜日の夜にうちに来たんだ。で、笹倉は日曜日の記憶が全くない。つまり、おそらく日曜に誘拐が起こったってことになる。てことは誘拐の実行から犯人の目的達成まで二日かからないで終了している。犯人からの脅迫があったなら警察にも話は言っているだろうし、取引の時間や場所、さらに身代金だった場合、現金も集めなければならぬ。それまでの流れをたった二日間で作るのは無理があるだろう。

「それは、そうかもしれないですね」

「まあどっちにしろ、完全に否定する証拠がないから可能性は残るんだが。今はまだ情報が足りないんだよ」

「じゃあ後は何を調べればいいんだ？」

なんでもいいんだが、とりあえず的を絞るならこれくらいだろうな。

「日曜のことだ。家の人の話が聞きたいな」

「とりあえず笹倉さんの家に行ってみますか？」

「いや。また月曜みたいに待ちぼうけは勘弁だから、まずは電話してみよう。番号は聞いているんだろ？」

「もちろんです！」

正直電話に出るとは思えなかった。まあ出たらラッキーくらいにしか考えてなかった。今の時間は月曜日に笹倉の家に行った時間とほぼ同じ時間だからな。外出って可能性が一番高いと思うね。

「もしもし、笹倉さんのお宅でしょうか？」

なんと予想に反して電話が取られたようだ。現在笹倉はうちにいるはずだから取ったのは母親で相違ないだろう。が、しかし電話をかけている岩崎は想定外の相手の名称を明示した。

「え？警察？」

現在午後五時三十分。俺たちは月曜と同様に笹倉家のあるアパートの前に来ていた。何を隠そう警察に呼び出しを食らったのである。そりゃ何らかの事件と関係しているであろう家に電話をしてきたら関係者であろうとなかろうと話を聞いたほうがいい。まあ必ずしも有益とは限らないが。俺たちのように。

「あの、何かあったんですか？」

警察に話しかけているのは岩崎だ。こういうときには便利なやつだ。話を聞くのはあいつ一人に任せていいだろう。直接聞いた以上に分かりやすく説明してくれそうだ。俺は一人現場にやってきている警察関係者の様子を伺っていた。

ところでここに来ている「俺たち」とは俺、加えて岩崎だけである。麻生にはうちに行ってもらった。なんとなくそうしたほうがいい気がした。

話を聞いている岩崎を目の端に捉えながら、俺はざっとあたりを眺めた。捜査員の数が半端ではない。これは物盗りとかそんなレベルではない気がする。もっと大きな、例えば殺人のような事件の捜査という感じがする。何かとても嫌な予感がするね。今の状況も限りなく最悪に近いわけなんだが、これ以上悪くならないように願いたい。

話を終えた岩崎がててて、とこっちに向かって走ってきた。とりあえず事件と関係ないことを理解してくれたようで事情聴取も任意同行もないらしい。

「すごいことが分かりました！」

「何が分かったんだ？」

「なんと笹倉さんのお父さんは最近亡くなった大手電機メーカーの社長さんだったんです！」

「そりゃすごいな。だが苗字が違うな」

「今は離婚してしまっているので、笹倉は母方の苗字だそうです」

確かにすごい情報だ。すごい情報だが、今ほしい情報とは違う気がするね。そっぴや日曜に自宅で殺されたんだっけ。

「で、警察はなんでここに来ているんだ？」
「それが警察は笹倉さんのお母さんが犯人ではないかと踏んでいる
ようです」

なるほど。それでこの人数な訳だ。

「その根拠はなんだ？」

「日曜日にお父さんの自宅に行っているらしいんです。それでそれ
から行方が分からなくなっているようです」

「動機は？」

「はつきりしたことは分かっているようなのですが、お金じゃな
いかと言っていましたね。養育費についての訴訟を起こしているよ
うです」

「強盗殺人という線はないのか？」

「大手の社長さんちですよ？簡単にに入れるわけないじゃないですか」

確かにな。これは面倒な話になってきたな。まさか殺人が絡んで
くるとは思いもよらなかつたね。笹倉も共犯とかいうことはないだ
ろうな。

「笹倉のことは言っていないよな？」

「もちろんです。言えるわけじゃないじゃないですか」

事件は思わぬ方向に転がり始めたが、笹倉の記憶障害の原因は間
違いなくこれだろう。おそらく笹倉は現場にいたのだ。それで事件
の一部始終を見ているに違いない。

「なんか大変なことになってますねー。とりあえず成瀬さんちに行
ってこのことをお二人に報告しましょう」

俺はこの岩崎の案に賛成し、家に帰ることにした。当初の目的であった原因らしきものを発見できたし、これによって笹倉が失っていた記憶を取り戻すかもしれない。

しかし、と俺は思った。一人の少女の記憶障害から殺人事件まで発展してしまった。この事件はこれですんなり終わってくれるとは到底思うことができなかった。

また面倒なことになってしまったもんだ。

「おかえりなさい」

家に帰ると笹倉が俺と岩崎を迎えてくれた。その笑顔がいつもと違うような気がしたのは、俺の気のせいだろう。さつき、殺人事件なんて非日常なことに関わってしまった少女、というレットルが貼られていることを知ったからだな。

とりあえず部屋に行って制服から着替えてリビングに帰ってくる
と、岩崎が今日の報告を始めていた。

岩崎はいつやったのか、さっきのメモの清書を用意しており、俺にした説明よりさらに分かりやすいものになっていた。

「警察は社長さん殺人事件の最重要参考人としてお母様を探しているようでした」

「つまり犯人だと考えているということだな？」

「そういうことになりますね。マスコミは警察庁から圧力をかけられ、押さえられているようですが」

相槌を打つたのは麻生だ。笹倉は無言で俯いている。

「笹倉さん、大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫です・・・」

顔を見る限りとても大丈夫そうではない。岩崎は心配しながらも説明を続けた。相槌を打っているのは麻生だけで、笹倉は説明の間、一言もしゃべることはなかった。

「説明は以上です。何か聞きたいことはありませんか？」

岩崎は一気にしゃべり、報告をまとめた。二人からは質問は無いように沈黙している。ここで俺は先ほどから疑問に思っていたことを口に出した。

「麻生、お前はいつから笹倉と社長の関係を知っていたんだ？」

突然名前を呼ばれ、驚いた表情になる。それから一瞬泣きそうな情けない顔になった。

「それは・・・」

「私がさっき教えたの」

答えたのは笹倉だった。笹倉は麻生が口を開く前に勢いよく話し始めた。

「私は今回のことで記憶をなくすことに恐怖を覚えたの。全てを失ったのではないはずなのに自分が笹倉京子だと自信を持って言えなくなってしまうたの。そしてまたいつこういうことがあるか分から

ない。今度は完璧に記憶がなくなってしまうかもしれない。だから私が記憶喪失になって、自分が誰だか分からなくなっても、誰かが証明してくれるように自分自身のことを話しておきたかった。だから……」

笹倉はここまで一気にしゃべった。岩崎と麻生は圧倒されたような表情になっている。それだけ笹倉の言葉一言一言に気持ちが入っていた。

しかし俺の疑問は消えることは無かった。笹倉の言葉には力があった。そして実際本音なのだろう。だが、麻生の先ほどの表情からある確信があった。俺はこいつと人生の三分の二を過ごしている。あの表情はどんなときにする表情か、俺は熟知していた。

「今日はもうこの話はやめましょう。お腹も空きましたし、夕飯の支度に取り掛かりましょう」
「そうだな」

岩崎の言葉に三人が賛成した。賛成したのは俺以外であり、俺が賛成できないのは当然のことだった。

「あんだ、今日もうちで夕飯食べる気か？」
「仕様が無いじゃないですか！もうこんなに外も暗いですし、いろいろ駆け回ってお腹ペコペコなんですよ？」
「もしかして確信犯か？」
「そんなわけ無いじゃないですかー！」

……。確信犯なのは疑いようも無い。そう感じたのは俺だけじゃないはずだ。

「早くしてくださいよ、成瀬さん」

そういう岩崎に対して聞こえるようにわざと盛大にため息をつくと、俺はキッチンに向かった。食材は笹倉と麻生が買物に言ってくれていたようなので何も問題なかったが、買物代はきっちり請求された。

キッチンに来て手伝っていたのは岩崎だけで、残りの二人はリビングにいた。なぜかうちの食器の配置を熟知している岩崎はかなり役に立った。それに三人も四人もうちのキッチンにも入りはしないから何ら問題はない。むしろこっちのほうが効率がいい。

そのあと笹倉と麻生は何やらおかしな雰囲気をかもし出していた。麻生も笹倉も昨日や一昨日とは打って変わって、ものすごい勢いでしゃべり続けていた。それはもう岩崎を圧倒するくらいに。

麻生は何となく舞い上がっているだけのような気がしたのだが、さつきチラツと見せた表情が気になる。

笹倉のほうは楽しんでる自分を演じているように見えた。まあ俺の気のせいかもしれないが。

食事が終わってから宴会は続き、最初は二人の勢いに押されていた岩崎も、慣れてきたのか、いつものマシンガントークを取り戻し、いつになく場は盛り上がった。午後十時過ぎたくらいに岩崎と麻生は帰宅し、そのあと俺と笹倉は風呂に入って（もちろん一緒にではなく別々に）、さっさと寝た。その間、ずっと無言でいたわけではなく、いくつかの会話はあったと思うがよく覚えていない。

たぶん大した内容じゃなかったように思えるね。

偶然という名の奇跡～愛の記憶喪失～

木曜日

昨日までとなんら変わることもなく、今日も滞りなく授業が終了し、下校のチャイムが若干生徒の少なくなつた校内に響き渡つていた。部活のある生徒は、活動場所に向かうために、部活のない生徒は、帰路に着くためにそれぞれかばんを持ち、教室から出て行った。

俺はというとそんな生徒と混じらずにホームルームが終わつてもしばらく教室に残っていた。

窓から外を見ると、授業を終えたたくさん生徒たちがいくつもの輪を作つて下校を開始していた。日常の風景だった。こういう風景を見ていると俺が今週の頭からエンカウントしてしまった事件など夢の中の出来事に思えてならない。なんでこんなことに……。なんてことを考えんのはもういい加減にやめておこう。どうせならさっさと事件を解決してしまったほうがよっぽど気持ちがいいだろう。

今日は一日ずっと考え事をしていた。その内容はもちろん授業のことなんかではあるはずも無く、例の笹倉記憶（ほぼ全部）喪失事件のことである。これからやることなど限られているのだが、どうやっていいものか、結構悩みものなのだ。

「どうしたんですか？誰か探しているんですか？」

相変わらず窓から外を見下ろしていた俺に話しかけてきたのは、他でもない、岩崎・麻生ペアだった。

「別にあんたには関係ない」

「またあ！教えてくれたっていいじゃないですか！別に成瀬さんがどんな女の子が好きでも私には関係ないですけどね、まあ私と成瀬さんの仲ですからそれくらいのごときは教えてくれてもいいんじゃないですかね、別に興味ないですけどね！」

岩崎はろくに息継ぎもしないで一気にしゃべった。勝手に怪しげな関係にしないでもらいたいね。まあどうでもいいのだが。とりあえず俺が今することは……。

「麻生。今日も先にうちに行っててくれ」

「ん？ああ分かったよ」

麻生がうちに向かってから大体三時間後に俺たちは学校を出た。家に着いたときにはすでにもう八時を回っていた。

「遅かったな」

「ちよつとな」

麻生と笹倉はそろって俺たちを迎えてくれた。

「とりあえず腹が減ったな。まず夕飯にしよう。お前らまたうちで食べていくんだろ？」

この俺の問いかけに二人は無言でうなずいた。こいつらはうちで夕飯を食べることに對して、なんら疑問を抱かないらしい。少しは相手も迷惑と言うものも考えてもらいたいね。まあ今日に限ってはそっちのほうの方が都合なんだが。

それからまたいつものように俺と岩崎が二人で夕飯の準備に取り掛かる。リビングにいる麻生と笹倉は、聞こえないがなにやら話をしているようだ。これは俺の勘だが、事件とは関係ない話だと思うね。何となく楽しそうだしさ。

こっちは食事を作っている最中、終始無言のままだった。

「なにか言いたそうだな。俺と、笹倉に」

岩崎のそんな雰囲気を感じて、そう問いかけた。岩崎は今までせわしく動かしていた手をはたと止め、そのままうつむいてこう答えた。

「言いたいことも聞きたいこともたくさんあります。この時間じゃ足りないくらい。でもとりあえず成瀬さんの考えに従います」

こう言ってからまた作業に取り掛かり始めた。それから、でも、と言い、こっちに体後と振り向いて、

「首尾よく全て終わってからきちんと説明してもらいましょう！」

と言っただけのもののように満面の笑みで微笑んだ。そのとき俺は、残念ながら、岩崎の物分りのよさに感謝してしまった。そのあと岩崎は何もなかったように普段の岩崎に戻った。まったく、こいつには敵わないな。

準備ができ、食事が始まると、リビングは麻生と岩崎の独壇場と化した。今日の学校での話を面白おかしく語り始めた。その会話は漫才のように、見事にボケと突っ込みに分かれ、ハイテンポなりズ

ムを刻んでいた。二人の漫才に、笹倉は終始笑い続けていた。

俺はぼーっと周りからその様子を見ていたが、その光景はこの三人の本当の姿のように見えた。月曜なんて、それこそ本当の他人のようにどこかよそよそしかったが、ここに来てきちんとした友達以上の関係になれた気がした。

だが俺にはこの関係がただ単純にそれぞれの心の壁がなくなってきた関係ではないと知っている。皮肉なことに今日のこの会話が俺の確信を高めていた。

もつたいない。本当にもつたいないと思う。もつと違う出会い、きつかけだったならとてもいい付き合いができたに違いない。悪夢がきつかけなんだ。これからもいい関係が続けられないのは明らかだった。

知らず知らずのうちに俺は暗い雰囲気を作っていたようだ。

それを心配したのか、三人が俺に注目していた。

「どうした、成瀬。そんな怖い顔して」

「どっか痛いのか？」

こう問いかけてきたのは、笹倉と麻生だった。岩崎は黙ったままだった。俺が岩崎のほうを見るとときこちない笑みを作った。こう言った。

「何か悩みですか？話してくださいよお。私たちの仲じゃないですかあ」

「勝手に親しげな関係にするな」

おそらく、悩み、と言う言葉で思い出したのだろう。麻生がはつとしたような顔になり、例の事件のことについて聞いてきた。

「そういえば今日もなにか調べてきたんだろ？なにか収穫はあったのか？」

「あつたな。いくつか」

「どんな情報だ？」

「詳しいことは私がお答えいたしましょう！」

身を乗り出してきた麻生に対して、岩崎が答えた。岩崎は近くにあった自分の学生バッグから手帳のような物を取り出して、わざとらしく、こほん、と小さく咳払いをした。

いつの間にか笹倉も身を乗り出して、一言一句逃さないように岩崎の言葉に集中し始めた。

「今日は笹倉さんの担任の先生に話しを聞いてきました。どうやら先生は警察と接触していたようです」

岩崎は手帳をちらちら見ながら、とてもテンポよく話を進めていく。

「私たちは、最近学校に来ていない笹倉さんのことについて、先生に話を聞きに行きました」

もちろん、学校に言っていない理由など、とっくに理解している。いわゆる口実というやつだ。担任は、連絡が来ていないから分からない、と答えた。

次に、例の社長との関係が原因なのでは？と聞いたところ、担任は、そのことを知っていたのか、と答え、警察から聞いたことを話してくれた。

「警察は、昨日言ったとおり、笹倉さんのお母様を犯人だと思っているそうです。お母様の居場所を聞くために笹倉さんを探していたようで、学校にはその用事で来ていたみたいです」

笹倉の母親の犯行はほぼ確実に、社長宅の防犯カメラにもその姿が捉えられていて、推定の犯行時刻と一致する。残念ながら、社長の書斎にはカメラは設置されておらず、犯行現場をカメラで捉えることはできなかったが、状況証拠は十分すぎるほど整っているようだ。

「動機の件ですが、やはり養育費のことで間違いないそうです。先生が警察の人に尋ねたところ、はっきりした肯定は得られなかったが否定はしなかった、とおっしゃっていました」

「うそ・・・」

岩崎の情報に笹倉が力なくそうつぶやいた。

「だがまだ状況証拠だけしかないんだな？それだけじゃ起訴まで持つていけないはずだ！」

「しかし状況証拠だけでも任意同行はできます。細かく取調べを行えば、矛盾した回答を得られるかもしれませぬ」

「だが・・・」

麻生の質問に丁寧に岩崎が答える。麻生はまだ食い下がろうとしているが、言うべき言葉が出てこないようだ。

そこに追い討ちをかけるように岩崎が、それに、と付け足しをする。

「実は物的証拠も出てきたそうです。実は社長さんの書斎に家の誰のものでもない指紋があったようなのです。それが昨日、お母様のものだとわかったらしいのです」

「えっ!?!」

「そんな指紋があったなんて昨日は言っていなかったじゃないか」

「私たちも今日初めて聞きました。たぶん結果待ちの段階だったのでしょう」

「そんなはずない」

しばらく呆然としていた笹倉がボソツと言った。

「今なんて言っただんですか?」

「そんなはずないって言ったの!」

「どういうことですか?」

「お母さんは昔、仕事先で両手に大やけどをしたの。それ以来いつも薄手の手袋をつけているのよ。だから指紋なんて残るはずがないの!」

「そうなんですか?」

「だったらそれは警察の捜査ミス。あるいはたちの悪い誘導尋問だ!」

突然の展開に岩崎がたじろいだ。そして俺のほうを見る。麻生はこの答えに、助けに船とばかりに飛びついて、笹倉の援護をしている。

「だが、母親のものと見られる毛髪も発見済みだという」

「えっ!?!」

「だ、だが、それだって間違いだっている可能性もあるじゃないか！」

「警察が二度も簡単なミスをするとは思えない。仮に誘導尋問のネタだとしたら指紋一つでいいはずだ。わざわざ二つの作る必要はない」

「でも・・・可能性はあるはずだ」

「可能性の話をしたらキリがないだろう。さあ話を続けよう」

そういうと俺は岩崎のほうを見た。岩崎の顔が先ほどのようなたじろいだ顔から、いつもの自信にあふれた顔になった。岩崎はゆっくりうなずいて、話を戻します、と言って再び報告を始めた。

「警察はこれらの物的証拠、状況証拠を元に逮捕状を請求したそうです。罪名は強盗殺人で」

「強盗殺人？」

「どういうことだ？」

「死体発見時、書斎が荒らされていたそうです」

岩崎は手帳のページをめくり、詳しい説明を始めた。

発見時、書斎は荒れ放題で、足の踏み場もなかった。社長は几帳面で書斎はもちろん、家の中や車、ホテルまでも、いつも整理整頓を心がけていたそう。会社にいたっては部下に対しても、整理に関して厳しくしていたそうで、デスク周りが片付いていないやつは、減給を命じていたようだ。

問題は荒らし方だが、被害者の抵抗にあつたわけではなく、犯人が意図的にやったようだ。それも探し物をしていて、部屋をひっくり返していたわけではなく、ただちらかした、という感じらしい。警察は本来の目的物が何だったのか、混乱させるための工作だと考

えているという。

「金庫が開いていたことから、おそらく金目的だったと考えている
ようです」

「うそよ！」

岩崎がいい終わらないうちに笹倉が叫んだ。

「うそよ！そんなわけない！！」

そういう笹倉に俺はこう質問した。少し意地悪な気もしたが、こ
う聞かないことには話が進まない。

「なぜそう言い切れる。根拠は何だ？」

「それは……。でも……。そんなわけないんだもん」

「なぜだ？なにか知っているのか？」

「だって……………」

俺の質問に笹倉は押し黙ってしまった。この時点で俺は確信して
いた。この沈黙が何よりも俺を確信させた。俺の推測でほぼ間違
ない。これ以上は無意味だ。今日はここまでにしよう。まだ分かっ
ていないこともたくさんあるが、それは明日になれば分かることだ。

「とにかく今日の報告はこれでおしまいだ。というか、この事件に
関わるのも今日でおしまい」

「なんで？」

「逮捕状が出れば俺たちにはなにもない」

「……………」

「少し休憩したら今日はもう解散だ」

「あー今日も泊まっていてもいいですか？」

「んー。まあいいけど」

「じゃあ決まりです！麻生さんも泊まっていきましょう！今日はもう事件の話はなしにして、楽しみましょうー！」

食事が終わり、片付けに入る。片付いた食器を持ち、台所に向かうとあとから岩崎が同じく食器を持って、台所にやってきた。麻生と笹倉はまだ食卓にいる。特に会話はしていないようだ。

「これでよかったですか？」

「ああ。これで問題ない」

「決着は明日ですか？」

「そうだな。明日全部終わる」

「ハッピーエンドになればいいのですが・・・」

「ならないだろうな。これは殺人事件だからな」

「これから麻生さんと笹倉さん、気まづくならないですか？」

「なったらそれまでの関係だったと言うことだ。さっきから質問ばかりだな？」

「そうですね？」

「まあべつにいいけど」

「じゃあ最後にもうひとつ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「これから私たちはどうなってしまうのでしょうか？」

「It's only God Knows...それは神だけが知っている」

決戦は金曜日

目が覚めると、いつもと同じ朝だった。

朝日は眩しく、今日の日が快晴であることを告げていた。いい天気だ。こんな日は、少しでも体が軽くなったような気分になる。今日が普通の日であったのならば……。身体はいつもより何倍か重い。自分がこうなるように仕組んだことだとはいえ、正直やらなくていいのならやらない道を俺は歩むだろう。

はあ。今更ながら俺はなんて意気地のない人間なのだろうか。一度やると決めてここまで来たのだ。覚悟を決めてやり切ろう。別の道もあつたのかもしれないが、俺はこの道を選んだのだ。最善とは思わないが、俺の中で悪くないエンディングを迎えられるような道を選んだつもりだ。じゃあこの道を最後まで歩き切ろう。

時計を見るともう結構いい時間だった。さて、そこらへんに寝ている三人組を起こすとするか。

「おい！そろそろ起きろ、遅刻するぞ」

と、まあ結構声を張ったかな。三人とも実に眠そうだった。が、意外にみんな寝起きがいいほうらしく、これ以上目覚ましじみたマネはする必要がなかった。それから全員で朝食の支度をした。朝食は二十分くらいで終わった。朝食の間、なかなか賑やかだったが、会話の内容はあまり覚えていない。そんなに重要な話ではなかったと思うね。

起きた時間はいつもどおりだったが、朝食が終わってみるといつ

もより時間が余った。することもなかったから今日はちょいと早いが学校に向かうことにした。

「俺はもう行くが、お前たちはどうする？」

「えっ！じゃ、じゃあ私も行きます。もうちょっと待っててください」

「麻生。お前は？」

「んー。じゃあ俺も一緒に出るよ」

「分かった」

正直こう言うと思っていた。俺たちはしばらく岩崎の支度を待っていた。五分ほどしたら、支度ができたらしく、俺たちはいつもより三十分早く出発した。

「あ！俺忘れ物したわ。一回自分の家に行かなきゃ。悪いが先行っててくれ！」

家を出てしばらくすると麻生がこう言って、来た道を戻っていた。

麻生がいなくなってから、おそらく一、二分だったと思う、俺たちは黙りこくっていた。そして暗くなっていく二人の周りの空気を振り払うかのように岩崎が静かに口を開いた。

「実は私、密かに皆勤賞狙っていたんですね。小学校から欠席はおるか、早退も遅刻もしたことなかったんですよ」

「それは奇遇だな。実は俺もだ。あと、麻生もだ」

正直俺はそれほどこだわっていない。ただ学校に行くことが習慣になっているから面倒だからと言う理由で休もうとは思わないし、

風邪や病気には小さいときからあまりかかったことない。だから毎日欠かさず行っているだけだ。

まあ麻生のほうは分からないが。

「あーあ。まだ高校に入ってから半年しか経っていないのにこんなところで記録が途切れてしまうのは不本意です」

「俺は別に強制してないぞ。行きたくないなら付いて来なくてもいい」

これは俺の本音だった。これは俺が考えたことなんだ。俺が決めた道だ。だから他人まで巻き込む気は毛頭ない。ましてや、仲間、友人を裏切る行為なのだから・・・。

「あれ？すねているんですか？」

岩崎はからかうように俺の顔を覗き込んできた。俺は鏡を持っていないから、そのときどんな顔をしていたのか、分からなかったが、岩崎は可笑しそうにくすくす笑った。

「大丈夫ですよ、ちゃんと付いて行きますから。皆勤賞と比べられないほど重要なことです。まあだから不本意なんですけどね」

変なやつではあるが、岩崎は結構冷静な考えをする。

「元気出して行きましょう！！では、しゅっぱーっ！」

麻生が忘れ物をとりに行くと言っていなくなってから、約三十分が経過した。今から急いで学校に向かえばぎりぎり間に合うだろう。しかし俺も岩崎もそんなことはしない。というか思いつきもしな

ったね。まだやるべきことが残りまくっている。それを片付けるまで俺はここを動くつもりはなかった。

今俺たちがいるところには麻生と笹倉もいた。だが、向こうは俺たちに気づいていない。周りをきよるきよる見渡しているのは後ろめたさの現れだろう。

「ここまで予定通りですが、これからどうしますか？」

俺たちは、一旦家に向かった麻生を尾行していた。麻生は俺たちに言ったことと違って、俺の家に帰っていった。それから数分後に笹倉と一緒に外に出てきたのだ。そして歩き続けて二十分、今に至るというわけだ。

麻生たちは目的地に着いたらしく、俺たちの作戦の第一段階はすでに成功したと言える。問題はこれからだ。

「しばらく様子を見る。二人が中に入っていたら、突撃だ」

麻生と笹倉は、倉庫らしきものの前にいる。ここは寂れた資材置き場のようなところだった。そんなところに人影を見つけたのは不可能に近く、何かを隠すにうってつけの場所に思える。朝倉にとってもそれがここを選んだ最大の要因だろう。

二人のほうになにやら動きがあった。どうやら周りに人がいないことを確信したらしく、倉庫の鍵を開錠したようだ。二人はもう一度周りをぐるりと見渡して中に入っていた。

「入りましたね」

「ああ」

岩崎の言葉には緊張の色がはつきり浮かんでいた。確かにこの場は何か特殊な空気によって満たされているような、そんな雰囲気をかもし出している。おそらくは俺たちだけなのだろう。しかしここで立ち止まっているわけには行かない。

「行くぞ」

「はい」

例の倉庫に向かって歩き出した。

制服のポケットに突っ込んだ両手には通常じゃ考えられないくらい汗ばんでいた。どうやら俺もまだ緊張できるらしい。

ここ最近緊張した記憶がないせいか、すっかり忘れていた。緊張することはこんなにも気持ちの悪いものだったことを。

ものすごい勢いで寿命が縮んでいるような気がする。改めて確認。俺はこういう状況が大嫌いだ。そういえば以前こんなものすごい緊張を体験した覚えがある。確かあれは小学生のとき、一人でアメリカの町を歩き回ったときだ。あれは迷子になってそれどころではなかったが、アメリカ人に話しかけるのにはいささか肝を冷やした記憶がある。

そんなことを考えているうちに倉庫まであと数メートルのところまで来ていた。いったい俺は何を考えているんだ、こんなときにいや、こんなことを考えられるくらいには落ち着いている、ということになるのか？

ふとそのとき、俺の右腕に羽毛のようにやんわりとした力が加わ

った。岩崎だった。岩崎が俺の制服の袖口をつかんでいた。何か壊れ物を扱うようなやさしい手つきで……。

表情こそ真剣な顔つきで覚悟を決めているようだが、明らかに青ざめているし、口は真一文字のまま開こうとしない。いつ貧血で倒れてもおかしくないような顔をしていた。これが真夏の朝礼だったら間違いなく退場を宣告されているはずだ。そんな岩崎を見て改めて俺は思った。

ああ、こいつも怖いんだな、緊張しているんだな、と。それなのに必死にそれを隠そうとしている。俺の邪魔だけはしないように必死でこらえている。こいつは俺なんかよりずっと心が強い。顔が青ざめるほどの恐怖を理性で押さえ込もうとしている。そんな岩崎を見ていると俺は緊張が一気に解けた。恐怖が消え失せた。

そして代わりに覚悟ができた。さあ、この一週間を終わらせよう。

俺はさっき二人が中に入っていった倉庫の扉に手をかけた。

そして俺はさっきと同じセリフを岩崎にもう一度言った。

「行くぞ。覚悟はいいな」

「はい！」

岩崎もさっきと同じ返事をした。だが、さっきと違ってその返事には力があつた。

岩崎の返答を確認した俺は勢いよく扉を開いた。そこには驚いて開いた口がふさがらないような雰囲気、笹倉と麻生、そしてもう一人見知らぬ女性がいた。

「よお、ご兩人。こんなところで会うなんて奇遇だな。学校サボって何してんだ？」

俺はなるべく軽いセリフを吐いてみた。驚いたことに口調も軽くなっていた。そこには緊張や恐れなんてものは一切なく、本当に、学校サボっている友人を冗談交じりに正している、なんて感じの口調だった。

一方麻生たちは未だ状況が理解できていないらしく、開いた口からまだ何も言葉を発せずじまつた。

「よお、麻生。忘れ物は自分の家じゃなくてこんなところにあるのか？」

「成瀬！お前らここで何をしているんだ？」

二言目の俺の言葉によやく反応をした麻生だが、頭は冷静になつていたようで、例の見知らぬ女性を自分の体で隠しながら奥の部屋へ誘導していた。

「お前らこそ、いったい自分たちが何をしているのか分かっているのか？」

この言葉に笹倉がビクツと小さく反応した。

「麻生、お前は馬鹿だからきつと意味も分からず笹倉の手助けをしているんだろ？だから俺はお前らに今の状況を丁寧に教えてやる。そのためここに来たんだ」

「なんのことだ？」

「今の人、笹倉の母親だろ？」

「・・・っ！」

必死で動揺を隠しているようだ。言葉こそ出なかったが表情に変化はなかった。だが俺にはその微妙な変化と言えないような変化で十分だった。

「麻生。俺たちは長い付き合いだからな。お前の嘘なんか簡単に見抜ける。お前の考えはお見通しなんだよ。今のとぼけたセリフも、さっきの忘れ物も、本当は笹倉は記憶を取り戻していることも、な」

今度はまったくリアクションがなかった。だが、俺は話を続けた。

「実際に記憶を取り戻したのは水曜か。帰ってきたときお前は、いや、お前たちは少しおかしかったからな」

俺の話を聞いているのかいないのか、笹倉はうつむいたまま動こうとしない。だんだん落ち着いてきたのか、麻生の方は表情がいつものようになってきている。こいつがここまで冷静なやつだとは思わなかった。

「成瀬。お前は何を言ってるんだ？笹倉さんはまだ記憶を取り戻していないし、笹倉さんのお母さんもここにいない。まだ失踪中だ。昨日お前たちが教えてくれたじゃないか。そうだったよな、岩崎。お前は昨日そう言ったよな？」

岩崎はずっと下を向いていた。少しだけ見えていたその横顔は、普段見たことない、すごく悲しそうな顔をしていた。だが、麻生の問いかけに答えるべく、上げた顔は悲しみの色など微塵もない、いつもの強い岩崎の顔だった。

「申し訳ありません、麻生さん。確かに私は昨日そう言いましたが、あれは私たちが考えたフィクション、何の根拠もない私たちの推測に過ぎません」

「……。それどうということだよ」

「言葉のままだ。昨日俺たちが持ってきた情報は全て俺たちがでっち上げた嘘っぱちの情報だ。昨日俺たちはなんの情報収集もしていない」

「どうということだ？」

現在の時刻九時半。もう授業が始まっている。まあ今日は授業なんてどうでもいい。授業がどうでもよくなれば学生ってやつはただの暇人だ。時間を気にする必要もない。

「俺としてはこんな話しても意味無いと思うし、お前らの話のほうに興味あるんだが、まあいい。名を聞くときはまず自分から、って言うしな。いいだろう、話してやるよ。昨日のことを。ちなみに逮捕状の話もちろんうそだ。だから安心して聞け」

「今日は何を調べるんですか？」

あっさり帰っていった麻生のさまを見ながら、岩崎はこう質問した。この質問に対して俺は実に簡潔に答えた。

「何も」

「はい？どうということですか？」

「もう第三者からの情報収集は必要ないということだ」

「どうしてですか？まだ分からないことだらけじゃないですか！」
「情報収集の手段がない」

俺たちが持つている以上の情報を保持しているやつらは警察だけだ。警察が一高校生である俺たちに殺人事件の調査結果をご丁寧にも教えて下さるわけがない。

「じゃあもうお手上げなんですか？私たちにできることは何もありませんか？」

「いや。俺たちには警察すら持ってない、リーサルウェポンがある」

「もしかして笹倉さんですか？」

岩崎ははっとして言った。俺は黙ってうなずいた。

「でも笹倉さんは事件と関わっていたのかどうか分かりませんよ？」
「いや、かなり高い確率で関わっていたと思うよ」

自分の父親であろう人物が何者かに殺され、母親は失踪。で、その二人の子供である笹倉自身は何か強いショックを受け記憶喪失に家族全員が全く関係ない事件にしかも経った数時間のうちに巻き込まれる確率はいかほどのものか。

普通に考えれば、母親に連れられて父親のところに行った。無論お互い顔を知っている仲なのだから何の問題なく家の中に入ることができる。それから書斎の中で言い争いになったか、計画的な犯行だったのか知らないが、そこで事件が起こり、母親は逃げ、笹倉は記憶喪失して今に至る。

「それなら麻生との約束をすっぱかしたのも説明が付くしな」

「確かにそれは言えてますけど、でも笹倉さんは事件のことはおろか、ほとんど記憶をなくしてしまっているんですよ。いったいどうするんですか？」

「もうあいつは思い出しているよ」

岩崎は顔をしかめた。あからさまに、何を言っているんだこいつ、と言いたそうな顔である。俺はそれを無視して話を続ける。

「あいつがなぜそのことを俺たちに言わないのか、なぜ俺の家から出て行かないのか、ということだが、まああまり考えられる理由はないな」

「ちよちよちよ、ちよっと待ってください！えーっとなんでそうなるんですか？理由はあるんですか？」

調子よくしゃべっていた俺を止めて話の腰を折りやがった。

「ある時期から笹倉の態度が少し変化していただろ？」

「そうでしたか？気づきませんでしたか？」

していたんだ。あれは昨日のことだ。昨日も麻生を先に帰らせたんだ。そこには今日のような意図はない。ただ何となくだったんだが。

俺が遅れて家に帰ると、なんとも言えない、ただいつもと違うとしか言えないのだが、二人の間に奇妙な雰囲気を感じた。それから奇妙の連続だ。俺の質問に対して妙な表情を見せていたし、火曜まで事件に対して全然積極性を見せていなかった麻生がやる気を出していたし、笹倉は俺たちに、特に俺に対する態度がその日の朝までと全然違っていた。

「おそらく水曜の俺たちが学校にいる間に記憶が戻ったんだろう」

「さつき成瀬さんが言いましたが、もし記憶が戻ったというなら私たちに教えてくださってもいいじゃないですか」

俺はなんでもないのである風に行った。

「俺たちには教えたくなかったんじゃないか」

「どうしてですか？」

ここから先は俺の推測になってしまふのだが、俺はおそらくこうではないかと考えている。

「笹倉の記憶が戻ったらまず何をするとと思う？」

「そうですね。とりあえず家に帰るんじゃないですか？これ以上成瀬さんと二人きりでいたら危ないですから」

突っ込むところなのかもしれないが、この際無視して話を先に進めるとしよう。しかしなんか腹が立つな。

「そうだ。まず家に帰るだろう。そうすると笹倉家には現在たくさん警察がいる。ということは警察の質問攻めに合うだろうな」

岩崎は、確かにそうですね、とうなずいた。しかし何かに気づいたようですぐ俺に疑問を投げかけたきた。

「だから私たちに言わないでまだ記憶喪失の振りをしているってことですね。でもそれって問題ありますよ。笹倉さんはどうやって現状を知ったんですか？実際自分の場所もよく分かっていないですし、警察の動きとかお母様の状況とかも分かっています。もしかしたら混乱していてそれどころじゃなかったかもしれないです」

確かにな。母親がすでに捕まっていたりしたらその配慮は全くの無意味だ。それに気が付いたら見知らぬ場所にいた、ってだけでとつともなく混乱するだろう。だが、矛盾が出たらその矛盾点を解消するような新たな仮説を追加すればいい。

「確かにお前の疑問は正しい。つまり状況を理解しないとそんな考えは生まれない、と？」

「そうです」

「じゃあ状況を教えてくれるやつがいれば問題ないわけだ」

「そうですね。何が言いたいんですか？」

「そんなやつがいたらどうする？」

「まさかいたんですか？」

「そういうことだ。そいつは現状だけではなく、積極的に例の事件のことを調べていて、せつせと情報と提供していたんだ。さらに俺の推測では俺らに対して黙っていることを提案したのもそいつだ」

ここまでしゃべればもう予想が付くかもしれない。というかもう登場人物がいない。簡単に言えばここにいないやつだ。

「それつてもしかして・・・」

「麻生だ」

俺が麻生に対して帰宅を命令したのはこれからやる計画を知られないためだ。

「簡単に言うと麻生はスパイだな。笹倉は麻生にだけ記憶が戻ったことを教えていたというわけだ。俺たちはまんまと騙されていた訳だ」

「でも確かにそうだという証拠がありません！それに今考えてみれば笹倉さんは最初から記憶を失っていなかった可能性があります」

「お前、そりゃ今更過ぎないか？」

「お前は月曜日の笹倉は演技に見えたか？」

「いいえ。しかし私は水曜の二人の不思議な雰囲気にも気づいていなかったわけですから、私の意見はたいした効力を持ちません」

でもまあ、俺も演技には見えなかったね。それに、

「もしそうだとしたら麻生のことが説明付かない」

俺が違和感を感じたのは笹倉だけじゃない。麻生もだ。というかまず最初におかしいと思ったのは麻生だ。

「だから成瀬さんが言ったように記憶が戻ったことを麻生さんにだけ言っていたのかも」

「笹倉が最初から記憶を失っていないなら、麻生を共犯にする利益は少ない。当初の問題点としてお前があげた現状の把握は自分でできるわけだし、もしかして麻生が口を滑らせることを考えるとあまりいい作戦ではない」

「確かにそうですね。でもまだ断定するのは早いと思いますよ」

「そうだな。だから今日帰ってからトラップを仕掛けてみようと思う」

「トラップですか？」

簡単に言うとうその情報をでっち上げる。あいつらが焦って自滅するような事件についてのうそを。多少過激な内容にすればおそらく食いついてくるだろうよ。重要なのは俺たちから話を切り出さないことだな。向こうから話を始めるように仕向けよう。気になってくるはずだから、向こうから情報を仕入れようとしてくるだろう。

「事件の報告内容はこれから考えると、あんたがいつものようにメモとってあいつらに発表してやってくれ」
「分かりました。しかし本当に引つかかってくれるでしょうか？」
「そうさせるような面白い冗談を考えないとな」

事件の現場とか証拠とか結構決定的なものも用意してしまえばいい。それが本当かどうかを知るすべはない。向こうは動かざるを得ないだろう。それを追跡すれば俺たちには本物の証拠が手に入る。現行犯という名の証拠がな。ということは追跡できる状況を作っていおかなきゃいけないわけだ。

「それと頼みなんだが・・・」

「まだあるんですか？今度は何です？」

「今日は俺の家に泊まっていけ」

「えっ！？泊まっていけって、成瀬さんの家にですか？」

気のせいかな、岩崎は少し顔を上気させている。

「そつだ。いやか？」

「べべ別に、いいいい嫌じゃないですけど・・・」

そつぽを向いてそう答えた。岩崎の横顔はなぜかとても嬉しそうに、顔を真っ赤にさせたまま微笑んでいた。

「じゃあそういうことで頼む」

「でもどうしたんですか？その、泊まってくれ、なんて。なんといつか、成瀬さんらしくないですね」

「そんなこと言わなくても分かるだろ」

「でも・・・。それでも言っただけです」

こいつは何を言っているんだ？さつきからなんだが歯切れが悪い。奥歯になんか引っかかっているような話し方だな。まあいい。明日のためにもはつきり言っておいたほうがいいだろう。こいつは一応俺側の人間だ。これくらいのこととはしてやるう。

「あいつらがトラップに引っかかれば、明日必ず何らかのアクションを起こすはずだ。決定的な証拠がない俺たちに残された道は現場を押さえることだ。そのためにあいつらがアクションを起こしたところを逃さないために少しでも長く俺の家においてもらいたい。一番手っ取り早いのは俺の家に泊まっていさせることだ。そういう状況を作り出すには麻生だけ誘うのは不自然だし、なにより俺から泊まっていってしまうように言うことがまず不自然だ。だからお前から泊まりたいといってもらいたいわけだ。お前が言うのが一番自然だからな」

理由を言い終えたのに反応がない。俺は不思議に思い岩崎のほうを見ると、さつきまでの嬉しそうな顔はどこへやら、今度は顔を真っ赤にして怒っているように見える。というか、間違いなく怒っているのだろう。

「どうした？」

「どうした？じゃありませんよ！何が、言わなくても分かるだろ、ですか！分かるわけないじゃないですか、そんなの！分かって言うほうが無茶ですよ！ええ、ええ。分かってましたよ！最初からおかしいと思いましたが！成瀬さんの口からから、泊まっていけ、なんてそんな言葉が出てくるわけなんですからね！そうですよ！私が馬鹿でしたよ！でも、まじめな顔でそんなこと言われたらちよつとは期待しちゃうじゃないですか！もしかしたら、って思っちゃった私を誰が攻められましようか！この高揚した気持ちは一体どうすればいいんですか！成瀬さんは本当に人が悪いですね！。極悪人ですね

「。そうやって思わせぶりなことを言っ、乙女の心を弄んで、いつも冷たくして、たまにやさしくして、さりげなくかっこいいと見せて！いったいあなたは何がしたいんですか！私をどうしたいんですかー！」

ここまで息継ぎなしで一気に言い終えると、岩崎は肩で息をしていた。いったい何のことを言っているのか訳分らないが、さすがの俺も少しびびったね。はっきり言って迫力に負けた。何だか分からないが、俺が悪いらしいということは分かったし、なんだか誤りたい気持ちになった。

「まあ別にいいですけど。成瀬さんはそういう人ですからね。知ってましたよ、ええ、ずっと前からね！」

そういつとかばんを持って教室から出て行ってしまった。教室のドアを思いっきり閉めて。岩崎がドアを閉める際に鳴らした金属音が誰もいない校舎に響き渡っていた。あのドアは衝突部分にゴムが張つてあるから、金属音なんてしないはずなのだが、いやはや。あんな音がするんだな。

何で怒っているのかは定かではないが、とりあえずこのままではまずいので岩崎を追いかけた。訳分らないが、俺が謝らないことには話すら聞いてくれなかつたので、俺にしては珍しく熱心に頭を下げたところ、どうにか許しを得ることに成功し、事態を収拾した。

「それで、現行犯っていったい何の現行犯ですか？」

「それは俺たちが何をしたいかによるな」

目的がなければ目指すものがない。目指すものがないければ、どこへ向かうか決めようがないからな。よって最終的な目的地を決めな

いことには先に進みようがない。

さっきまでの怒りモードから打って変わって、顔をうつむかせていた。

「どうした？」

「あの、やっぱり笹倉さんのお母様は殺人を犯したのでしょうか？」

「さあな。だが、その可能性は高いだろうな」

「そうなんですか・・・」

しばらく下を向いて暗い表情をしていた。何を考えているのか、俺には分かるはずもない。が、俺は何となくこう口にしていた。

「やはり自首してもらうしかないな」

岩崎は驚いたような顔でこちらを見上げた。

「罪を犯した以上、それを償わなくてはならないはずだ。きっと笹倉も笹倉の母親もそれを望んでいるのだろう。逃げてしまって引っ込みが付かなくなってしまったんだな。だから誰かが背中を押してやらなければなるまい」

驚いたような表情から一転、いつものおせっかい全開モードのスマイルに変わって岩崎は力強くうなずいた。

「はい！私たちが背中を押してあげましょう！」

「というわけで、昨日の話はお前たちをはめるために作られた完

全フィクションだ。現場にいたであろう、笹倉は予想通りの反応を見せたし、記憶が戻っていることも確信できた。予想外のことは指紋のことだな。火傷のことなどまったく予想していなかった俺たちは、指紋が発見されたなんて情報を用いたわけだ。そして逮捕状のことを話せば十中八九動かざるを得ないと予想した」

首尾よく全てを話し終えた俺はここで一息ついた。この話をしたところで何が変わるのか、俺には分からない。

俺は三人の表情を見た。岩崎はこの話の当事者だ。しかしいつものおせっかいはどこへやら、口出しもせず黙って聞いていた。

麻生は話の間、ずっと口を開けていた。文字通り、開いた口がふさがらない、ほど驚いていたのだろう。たぶん俺の話は聞いていたに違いない。笹倉に関しては俺たちが来てからずっと顔を伏せているので、どんな顔をしているのかはおろか、聞いているのかさえも分からない。黙っていても仕方がないので、俺は再び口を開いた。

「俺たちがお前らと会ったのは偶然じゃなく必然だ。お前らは俺の予想どおりうそ情報を聞いて居ても立ってもいられずにノコノコ俺たちを母親のところまで案内してくれたわけだ」

空気は重く暗い。この空気のせいかな、誰も口を開こうとしない。

「それとも俺の推測は見当違いだったか？ 的外れだったか？ だが、そんなことはどうでもいい。俺が一番聞きたいことは笹倉の母親は殺人を犯したのか？」

「そんなこと聞いてどうする？」

俺が聞いたのは笹倉だったが、答えたのは麻生だった。

「別にどうも。言つたる？俺は状況を説明しに来ただけだ」

「そんなのはいらぬ。俺は全部分かつてここにいる」

「お前が現時点で犯罪者だということも、か？」

麻生の表情が変わった。おそらくうすうす気づいていたに違いない。が、正面きつてこう言われると意味が違ってくるだろう。

「お前は知り合いが、友達がこんなに苦しんでいるのによくそんなことが言えるな！クールだとは思っていたが、ここまで冷めた奴だとは思っていなかった！」

「聞くが、ここで手助けして逃してやるのが笹倉のためになるのか？笹倉の母親のためになるのか？」

何を言っても無反応だった笹倉がこの言葉に反応し、肩をピクリと動かした。

「そんなの・・・」

麻生は何か言おうとしたらしいのだが、何を思ったのかそのまま黙ってしまった。俺は笹倉に近づいて、笹倉に向かって言った。

「本当にこれでいいのか？お前の母親は犯した罪も償わず、こうやってこれからも隠れて暮らすような人生送らせていいのか？」

笹倉は答えない。

「殺人って奴は口で言うのと実際にやるのでは全然違うものらしいな。ここまで人を弱らせるものらしい」

さつきちらつと見えた笹倉の母親は驚くほど細くなり、肌が土色になっていた。

「あのやせ方は異常だ」

「何が言いたいのか？そんな回りくどい言い方しないでつきり言え
ばいいじゃない！」

笹倉の呼吸が荒くなっているのが分かる。必死に何かを抑えているように見える。

「なあ、笹倉。あんたの母親はいつたいなんで苦しんでいるんだ？警察に追われているからか？それとも食べるものを通らないからか？違うだろ。人を、それも身近な人を殺してしまった、その罪の重さに苦しんでいるんだ。罪悪感っていうのは簡単に消えるものでもない。それが殺人によるものならなおさらだ。たいていのことは時間が解決してくれる。が、これだけは違う。それどころか時間が経つにつれて重く大きくなっていく。その重圧から逃れる方法は一つしかない。罪を償うことだ。それも強制的に、じゃない。自ら償うんだ」

笹倉は声を出さず下を向いたままだ。手で頭を抱え、耳をふさいでいるようにも見える。

「何が言いたいの？警察からは逃げられない、だから少しでも刑を軽くするために自首しろって、こんなこと無意味だからやめろって説教に来たの？私がそんなことしてくれって言った？もうほっといてよ」

笹倉はわだかまりを俺にぶつけてくるように、俺を責めるように言葉を投げかけてくる。

「最初に言っただろ？俺はただ状況を説明しに来ただけだ。混乱していて周りが見えてないだろうからな」

「お母さんは悪くない！」

「でも今は苦しんでいる」

「お母さんはいつでも私を助けてくれた！だから今度は私が助ける番なの！」

「あなたの母親がそう言ったのか？」

笹倉は答えられない。俺は続けて笹倉に問いかける

「あなたの母親に聞いたのかよ、警察に行きたくないって。捕まりたくないから助けてくれて言っただけだよ」

「お母さんは現場から逃げたんだ。捕まりたくないと思ってるはずよ！」

「俺にはそうは見えなかったな」

熱くなっている笹倉をよそに俺は冷静に答えた。

「さつきちらつと見たんだが、俺たちがここに来たときあなたの母親はほつとしたように見えたよ。たぶん第三者が来たことでやっと自分は罪を償えると思っただけじゃないかな」

「あんただって全部憶測じゃない！」

「そうだな」

「お母さんのことろくに知らないくせにそんなこと分かるわけないじゃない！」

「確かに分からないな。だからあとのこととはあんたが決めるんだ」

「えっ？」

俺は微笑んでみせる。

「何回も言うようだが俺は状況を確認しに来ただけだ。俺はあんたらに指図するつもりはまったくない。第一俺は無関係だ。他人の家の事情までおせっかいを焼くつもりは毛頭ない。あんたが俺の家から出て行ってくれるなら何でもいいよ」

俺は入ってきたドアに向かいながら独り言のように言う。

「あんたが言ったとおり、俺はあんたら親子のことを何も知らない。だからあとあんたがしたいようにすればいい。無関係な人間は立ち去るよ。せめてあんたの選んだ道が正解であるよう祈ってやるよ」

俺はドアを開け、その場から立ち去る。俺のあとを追って岩崎が付いて来た。

「これで大丈夫ですかね？」

「さあな。さつきも言ったが、あとは笹倉の考えることだ。俺たちにはどうにもできないよ」

「自首してくれるといいんですけど・・・」

「もうどうでもいいだろ。俺にできるのはここまでだ。それにもう終わったことだ。うだうだ考えたって仕様がな。それより腹減ったな。なんか食いに行こう」

「全く仕様がな人ですね。いざというときの自分のすごさを全然理解してないんですから」

「ああ？何ぶつぶつ言っているんだ？」

「別に何も言ってますせん！それよりなんであんなに笹倉さんのためにいろいろしていたんですか？変な下心があつたんですか？それこそどうでもいいですけどね！」

さつきからこいつが何を言っているのか全く分からん。俺は適当にうなずいて、歩くことに集中した。

さて、これからどうなるのやら。俺の力でどうにかできれば一番よかったのだが、あいにく俺はそんな人並みはずれた能力を持ち合わせてはいない。まあどうなったところで俺の知ったことじゃない。だが、やはり関わった以上、最後まで見届ける義務があるような気がする。最高の形で終われるとは少しも信じちゃいないが、せめてこれ以上あいつらが苦しまないような結末を迎えられたら、と思う。

エピソード

エピソード

土曜日は久しぶりの一人を満喫していた。月曜からずっと笹倉が家にいて、そのついでに麻生やら岩崎やらが来ていたから毎日賑やかだったのだが、改めて思うと一人というのは実に静かだった。恐ろしいことに少し退屈だと感じてしまった。その日はいつもの生活に戻って、買い物やら洗濯、掃除など、家事にいそしんだ。

そして日曜日。

朝刊にある殺人事件のことが書いてあった。記事の内容は大手電化製品メーカーの代表取締役が自宅で殺された事件で、犯人が土曜日未明に自首したらしい。容疑者は元妻で動機は養育費。以前調停で養育費の金額を設定したのだが、最近になって社長さんが突然もう払わないと言い出した。その真相を確かめるべく、容疑者は社長との間にできた娘を連れて社長宅に向かい、通された書斎で口論になり、物の弾みで元夫を殺してしまったという。

大手電化製品メーカーの社長が殺されたわりには、記事の取り上げ方は小さなもので、スポーツやら芸能やらのニュースに飲み込まれていた。世間から見たらあまり興味の持てる内容ではないらしく、やはり当事者にしかこのつらさは分からないということをも物語っていた。

月曜日。学校に行くとなんら変わらない日常があった。麻生と笹倉はそろって休みだったが、岩崎はいつものようにお節介を焼き、

頼んでもいないのに例の事件を新聞記事やらインターネットの記事やらをいろいろ持ってきて解説をしてくれた。

そして放課後。俺は一人、帰路に着きながらぼんやり考え事をしていた。今日は特に何も用事もなく、岩崎にどっか連れ回されることもなかったから、帰ろうと思ったたら四時半には家に着くことができた。

帰ろうと思ったら、ということとは、帰ろうと思わなかったわけで、現在午後八時過ぎ。いったい何をしてたかということ、ほとんど覚えていない。ただ何をするわけでもなく、いろいろなところに寄って道草を食いながら帰ってきた。普段ならこんなことはしない。じやあなぜこんなことをしたかということと実のところ、ある予感があったからだ。

それからしばらく歩いて俺のマンションである白い七階建ての建物が見えてきた。オートロックを開錠し、すでに一階にいたエレベーターに乗り込み、自宅の階数のボタンを押す。エレベーターに乗っている間は、黙って階数表示を見つめているのが慣わしであると勝手に考えているので、それを実行する。そしてドアが開き、歩出す。ふと気が付く。俺の部屋の前に誰か立っていた。

「あんだ、笹倉京子だよな？」

「はい」

先週と同じ問いかけをしたが同じ返事は返ってこなかった。返さなくても困ったが。

笹倉は俺のほうを向かず、手すりから外を見たまま話しかけてきた。

「新聞は見た？」

「ああ。いくつか見させてもらった。自首したんだってな」
「うん」

立ち話もなんだから中に入るよう進めようとしたが、なんだかそうするの躊躇われた。

「あのあと実際はどうしていいか分からなくて、すぐに判断することができなかつたの。でも結果的にこうしてよかつたんだと思う。自首を勧めたときのお母さんの顔は成瀬君が言っていたとおりほつとしたように見えた」

笹倉は悩んだ結果、やはり自首を勧めたようだ。俺は笹倉の下した判断に対して特に言うことはなかつたのだが、この判断はどうやら正解だつたようだ。

「ありがとう」

振り向いた笹倉の顔は笑顔だつた。輝いて見えるのは街灯のせいだけじゃないように思える。

「あの時成瀬君がいろいろ言ってくれなかつたら、私はお母さんも自分も不幸にするところだつた」

不幸、とはいったいどういうことを指すのだろうか。

「弁護士さんの話によると、少なくとも懲役三年以下。よくて執行猶予が付くかもしれないって。お母さんの犯した罪は本当にいけないことだと思うけど、罪を償って出てきたときにはまた新しく一緒

の生活ができると思うの。人生まだまだ先のほうが長いんだから、三年くらい立ち止まったって、そのあとの努力しだいですぐに取り戻せる。だから今はしっかり反省してもらいたい」

警察に捕まること、人を殺害してしまったこと。両方とも違う。本当に不幸なのは自分の人生を見失ってしまうこと、他人の幸福を願えないことだと思う

だから笹倉親子は不幸ではない。お互いの幸福を願い、これからをしっかりと見据え、新たな自分の人生を見つけようとしているのだから。

「礼には及ばないよ。俺はたいしたことしていない。だけど俺のくだらない話が少しでも役に立ったならよかった」

「君は変わっているね」

笹倉の言葉はほめているようにもけなしているようにも聞こえた。

「ところで麻生君はどうしてる？」

「今日は学校に来ていなかったから知らないな。麻生がどうかしたのか？」

「麻生君に言うておいて！私は好きな人がいるから君とは付き合えないって」

「好きな人？」

「うん。クールでめんどくさがりで、何に対しても無関心だけど、本当はすごく優しく、困っている人やかわいそうに人に対してすごく熱くて、さりげなく助けてくれる。そんな人なんだ！」

誰のことを言っているのか、さっぱりだがまあそんなに興味もないし麻生でないことが分かっただけで俺にとっては十分だ。

「麻生のこと気づいていたのか？」
「まあうすうすね」

笹倉のことはあまり知らなかったのだが、このことで少しイメージが変わったのか。意外に鋭かったんだな。

「それはいいとして、自分で言えばいいだろう」
「私、明日引越すんだ。転校するの」

少し考えてみれば簡単に分かることだった。笹倉は母子家庭だったし、元父親も死んでしまったのだ。だから九州にいる親戚の元に世話になるそうだ。今回の悲しい事件をきっかけに二人の距離がぐくと縮まっただけに、麻生にはとても残念な話だった。

「それで好きな人っていうのはもういいのか？」
「うん。正直末練といえは末練だけど、今の私じゃどうせ無理」
「まだ分らないだろう」
「ううん。だけどあきらめないよ。もっと自分を磨いてその人にふさわしい女性になれば、そのときは自分の気持ちを伝えようと思
う」

何にしても笹倉がここまで明るくなってよかった。一時は自殺とかするんじゃないかと、気をもんだが、少し先のことまで考えているうちは何も心配する必要はないだろう。

「最後に一つお願いがあるんだけど、聞いてくれる？」
「俺にできることなら何でも」

笹倉は俺の顔をじっと見つめていた。何にするのか悩んでいるよ

うにも見えるが、さすがにそんな長い間見られると困るんだが。

俺がたじろいでいると、笹倉が俺に前にすつと右手を差し出した。

「握手してください。いいかな？」

「そんなことでいいならいくらでも」

俺も右手を出す。そして握手。笹倉はさらに左手を重ねて、両手で俺の右手を握ってきた。最終的に自分の額の前に持っていき、祈るようなポーズになった。俺はどうリアクションをとったらいいのか分からずに、されるままになっていた。今日の笹倉には驚かされてばかりだった。

そして名残惜しむように俺の右手を離すと、優しく微笑みながらこう言った。

「改めてありがとう。私たち親子にとってあなたは神に等しき人物でした」

そこまでいくと逆に馬鹿にされているような気がしたが、そう言うのも気が引けたので、俺はこう返すだけに留めた。

「お礼を言われる覚えはないさ」

エピローグ（後書き）

これで簡潔になります。最後まで読んでいただいております。ありがとうございました。文章も内容も稚拙だったと思いますが、皆様楽しんでいただけたなら幸いです。近いうちに続編を書きたいと思っております。もしよろしければそちらのほうもよろしく願います。もしかしたらタイトルを変更するかもしれません。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1020c/>

偶然という名の奇跡～愛の記憶喪失～

2009年5月31日12時30分発行